

2011年度

「学生による授業評価アンケート」

報告書

2011年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

立教大学

2012年 9月

はじめに

総長 吉岡 知哉

立教大学の授業評価アンケートの最大の特徴は、そこにフィードバックのプロセスが組み込まれていることにあります。1. 選択肢による定型的なアンケートに加え、「記述による評価」欄を設けて学生の直接的な意見を反映させていること、2. アンケート結果をただ集計するだけではなく、結果に対する個々の教員の所見を求めていること、3. 所見票を全学の学生・教職員に公開していること、そして4. 各学部ごとの総評が報告書の形でまとめられていること。授業評価アンケートの「進化」を生み出してきたのも、このフィードバックのメカニズムにほかなりません。

授業評価アンケートでは、基本的に「一教員一科目」という方針を取ってきました。もとよりこれは、このアンケートが教員の授業力向上のための一施策として始められたという事情を反映しています。授業評価アンケートは、教員による授業方法の自己チェックに資することを第一の目的としていたのです。

けれども同時に注目しておくべき点は、本アンケートが質問項目として、学生自身の授業への取り組み方、学生が授業から得ることができたものを問うていることです。このことは、「学生による授業評価アンケート」が、授業を、教員からの一方向的な知識や技術の伝達としてではなく、教員と学生との相互的な関係において捉えようとする考え方に支えられていることを示しています。

FD と略される概念が高等教育に導入された当初、一部ではパワーポイントをはじめとする情報ツールの使用能力など、問題を教員の技能評価に還元される傾向も見られました。そのような理解は、一方で学生を顧客と見なす教育＝サービス論と、他方で学生を製品とみなす品質管理論と適度に親和しつつ、一定の広がりを見たと言えるでしょうが、本学の FD 推進は、そのような流行とは無縁に、授業を教育の一環として捉えるという基本姿勢を貫いてきたのです。

授業評価アンケートの「進化」は、授業を教育の一環として捉えるという、まさにこの点において生じています。それぞれの学部がアンケート対象となる科目を独自に選定するとともに、「学部等による設問」を別個に設定することを通じて、アンケートの結果は、個々の教員の自己チェックを超えて、授業やカリキュラムのあり方の検討のための素材を提供するという役割をも果たしつつあります。

言うまでもなく、授業は、教育という人間の営みの最前線にあつて、生身の知性が激しく接触する現場にほかなりません。それに対して授業評価アンケートの結果は常に過去に過ぎない。それにもかかわらず、否、それだからこそ、私たちはそこに表れた数字や言葉から、それらに還元されない何かの読み取ろうとします。その努力が、授業そのものを活性化させていくに違いありません。

本報告書が、教職員はもとより多くの人々、とりわけ授業の最も重要な当事者である学生の皆さんに読まれることを期待しています。

目次

はじめに	
1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について	1
1-1 目的	1
1-2 「報告書」作成の基本的な考え方	2
1-3 「所見票」について	3
1-4 実施科目の選定方針	4
2. 授業評価アンケートの実施概要	7
2-1 実施方式	7
2-2 設問項目	7
2-3 各学部等の科目選定方針	11
2-4 実施科目数	12
2-5 実施期間	12
2-6 回答者数	13
2-7 「所見票」の公開	13
3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック	15
3-1 科目担当者	15
3-2 学部等	15
4. 学部等総評	19
4-1 文学部	20
4-2 経済学部	22
4-3 理学部	25
4-4 社会学部	27
4-5 法学部	29
4-6 経営学部	32
4-7 異文化コミュニケーション学部	35
4-8 観光学部	38
4-9 コミュニティ福祉学部	40
4-10 現代心理学部	42
4-11 全学共通カリキュラム	44
4-12 学校・社会教育講座	49
5. 2011年度のまとめと今後の展望	51
6. 集計データ（資料編）	53
6-1 回答者数・回答率	53
6-2 学部等別平均値	54
6-3 「グループ集計」科目一覧	66

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について

本学における授業評価アンケートは、2004年度から毎年実施しており、その実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である2004年度報告書に書かれている通りである。以下にそれを転載する。

1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて—学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって—」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能

することを旨として改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

1-2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が 1-1 で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そ

して次回のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方針を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。⑤学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起するという点については、この報告書や同時に作成される所見票(とその集成である所見集)に示されるのではなく、今後おこなわれる将来の「学生による授業評価アンケート」にその成果が示されることになるだろう。

1-3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した(p.6参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが1冊にまとめられて所見集とされ、学生に対して学内で公

開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

- ① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
- ② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
- ③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメントを通してその内容を明らかにすることを求める。
- ④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次回アンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

(以上、2004年度報告書より転載)

1-4 実施科目の選定方針

本学における「学生による授業評価アンケート」は2004年度にスタートし、2006年度までの当初3年間は「講義科目を対象に1教員1科目」の原則で実施した。これにより、教員個々人の意識が高まり、授業改善の効果が上がったことは、各項目の数値が有意に上昇したことから明らかである。

2007年度には、スタート時に確認された目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」に比重を移し、実施対象科目に一部の演習科目を加えた上で、各学部・学科等の必要性により科目を選定する方式に切りかえた。2008年度、2009年度はこの方針を踏襲して実施した。

一方で、授業評価アンケート開始当初から、アンケートは単年度ごとにその目的と実施内容を検討・決定するのではなく、数年度単位の中期的な計画に基づいて展開する必要性が指摘されており、その策定に向けて、継続的に議論を行ってきた。

2006年度には、「1 教員 1 科目の原則による実施は、教員個々人の意識を高め、教員全員が自らの自己研修の資料を得る観点から、少なくとも数年に一度は必要である」との全学的合意がなされた（2007年1月25日、部長会）。その後、他大学の実施状況調査を行うとともに、全学教務委員会および教育改革推進会議での学部等からの意見収集ならびに協議を経て、2009年度の教育改革推進会議（2009年11月19日）において、2010年度以降の基本方針を以下のとおり決定した。

- ① 授業評価アンケートは毎年実施する。
- ② 「1 教員 1 科目」の原則による実施は、3年に一度とする。
- ③ ②以外の年度は、「学部等の必要性に応じた選定」により実施する。

2010年度は、定められた基本方針に拠って実施する初年度となり、上記の②「1 教員 1 科目」の原則により実施した。

2011年度は、基本方針に拠って上記の③「学部等の必要性に応じた選定」により実施した。ただし、東日本大震災の影響により、前期は授業期間が短縮となったので授業時間数についても考慮の上、科目選定を行うよう依頼した。各学部等における科目選定方針については、「2-3 各学部等の科目選定方針」（p.11）を参照されたい。なお、前期の実施科目は例年に比べて少なかった。

2011年度後期 立教大学「学生による授業評価アンケート」所見票

科目コード JHK01 科目名 授業評価0.1 開講曜日 火 開講時間 3 担当者 立教 太郎 教室 1111 履修者数 60 回答数 56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー
■	■	■	■	■	■	■

* (1)~(7), (8)は「該当しない」も含む

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70~89% 3:50~69% 2:30~49% 1:30%未満)
- 2) この授業に積極的に参加した
- 3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた
- 4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした
- 5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った
- 6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (1週間に 5.3時間以上 4.2~3時間 3.1~2時間 2.1時間未満 1.0時間)

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 聞きやすい話方だった
- 2) 各回の授業内容の量が適切だった
- 3) 各回の授業のねらいは明確だった
- 4) 各回の授業内容は明確だった
- 5) 十分な鮮活性が保たれた
- 6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった
- 7) 板書のしかたが適切だった
- 8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった
- 9) 教員は授業の準備を周到に行っていた

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと感じますか。

- 1) 自分にとって新しい考え方・発想
- 2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識
- 3) 自分で調べ、考える姿勢
- 4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) わかりやすい授業だった
- 2) 授業全体の目標が明確だった
- 3) 学問的興味をかきたてられた
- 4) この授業を受けて満足した

授業評価に対する担当教員の所見

記述による評価に対する担当教員の所見

改善に向けた今後の方針

2. 授業評価アンケートの実施概要

本報告書において、「学部等」とは、各学部、全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を示す。また、学部表示は科目開設学部を示しており、回答者（学生）の所属ではない。

2-1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から 30 分間、もしくは授業終了前の 30 分間）において行うこととした。

2-2 設問項目

1) アンケートの質問紙

5 段階による評価方式の設問を 23 設問、記述による評価欄を 2 箇所構成とした（pp. 8-9 参照）。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もあるが、実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1 学部あたり最大で 7 設問を設定できるようにした。2011 年度は、文学部（2 設問）、経済学部（7 設問）、理学部（3 設問）、観光学部（7 設問）、現代心理学部（4 設問）、全学共通カリキュラム（3 設問）が学部設問項目を設定した（p.10 参照）。

2) 質問紙の修正

2011 年度より、以下の設問項目の修正を行った。

①学生の所属欄の細分化

従来 1 つであった「本学学部生以外」のマーク欄を、以下の 3 つに細分化した。

- ・ 特別外国人学生（Special Int'l Students）
- ・ 特別聴講学生（f-Campus、立教女学院短大など）
- ・ 上記以外（本学大学院生、科目等履修生など）

②回答選択肢への「該当しない」の追加

下記 2 設問に「該当しない」を追加した。

Ⅱ-7) 「板書のしかたが適切だった」

Ⅱ-8) 「映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった」

また、「該当しない」の追加を機に設問文を下記の通り修正した。

（新）「映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった」

（旧）「映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的だった」

2011年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。調査は無記名で行われ、回答の内容が成績評価に影響することはありません。大学を構成する重要な一員である学生として、みなさん自身が大学教育をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって回答してください。
立教大学

(注意) 1. マークにはHBの鉛筆を使うこと。 2. 太枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 誤りは消しゴムで完全に消すこと。
4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 折りまげたり汚したりしないこと。

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

科目コード/Course No.	本学部生 (学部・学科は学生番号の3・4桁目のアルファベット)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	学部 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	学科 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (M) (N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	
(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	学年 (1) (2) (3) (4)
(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	本学部生以外
(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	特別外国人学生 (Special International Students) (特外)
(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	特別聴講学生 (f-Campus、立教女学院短大など) (聴講)
	上記以外 (本学大学院生、科目等履修生など) (その他)

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5：大いにそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない
〔評価欄〕

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満	(5) (4) (3) (2) (1)
2) この授業に積極的に参加した	(5) (4) (3) (2) (1)
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	(5) (4) (3) (2) (1)
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	(5) (4) (3) (2) (1)
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	(5) (4) (3) (2) (1)
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (次の中から選んでマークしてください) 平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間	(5) (4) (3) (2) (1)
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 聞きやすい話し方だった	(5) (4) (3) (2) (1)
2) 各回の授業内容の量が適切だった	(5) (4) (3) (2) (1)
3) 各回の授業のねらいは明確だった	(5) (4) (3) (2) (1)
4) 各回の授業内容は明確だった	(5) (4) (3) (2) (1)
5) 十分な静粛性が保たれた	(5) (4) (3) (2) (1)
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	(5) (4) (3) (2) (1)
7) 板書のしかたが適切だった	(5) (4) (3) (2) (1) 該当しない (9)
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	(5) (4) (3) (2) (1) 該当しない (9)
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	(5) (4) (3) (2) (1)
III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。	
1) 自分にとって新しい考え方・発想	(5) (4) (3) (2) (1)
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	(5) (4) (3) (2) (1)
3) 自分で調べ、考える姿勢	(5) (4) (3) (2) (1)
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	(5) (4) (3) (2) (1)
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) わかりやすい授業だった	(5) (4) (3) (2) (1)
2) 授業全体の目標が明確だった	(5) (4) (3) (2) (1)
3) 学問的興味をかきたてられた	(5) (4) (3) (2) (1)
4) この授業を受けて満足した	(5) (4) (3) (2) (1)

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。

V. 学部等による設問

なし

※ 独自の設問を設定した学部は、その設問が記載される（次ページ参照のこと）。

VI. 記述による評価

みなさん自身が授業をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって記入してください。
みなさんの回答は教員が読み、授業の参考にします。無責任な誹謗や中傷は避け、真摯な態度で回答してください。

1)この授業で良いと思った点があれば書いてください。

<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>

2)この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。

<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>

ご協力ありがとうございました

V. 学部等による設問

(文学部)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった

(経済学部)

- 1) (全科目共通設問) 教室の規模と設備は適切であった
- 2) (基礎ゼミナール2) 英語で経済文献を読む力が増した
- 3) (基礎ゼミナール2) レジюмеやレポート作成の際に英語文献にまで視野が広がった
- 4) (情報処理系科目※)「情報処理入門」(1年次前期科目)は当科目の学習に役立っている
- 5) (情報処理系科目※)表計算ソフト(Excel)の応用力が身についた
- 6) (情報処理系科目※)Power Pointでプレゼンテーション資料を作成する力が身についた
- 7) (情報処理系科目※)WEB上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた

※情報処理系科目とは、以下の科目をさす

情報処理入門2、経済情報処理B、政策情報処理B、財務情報処理B

(理学部)

- 1) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた
- 2) (1年次前期必修科目のみ)教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた
- 3) (必修科目のみ)授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった

(観光学部)

- 1) わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ(観光学部以外の学生は答えないこと)
- 2) わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う
- 3) わたしは、新座キャンパスで学ぶことに満足している
- 4) わたしは、旅行することが好きだ
- 5) わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した
- 6) わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた
- 7) わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた

(現代心理学部)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) 現代心理学部の教育研究設備に満足している

(全学共通カリキュラム)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった

2-3 各学部等の科目選定方針

実施対象科目は、これまで通り、学部科目（全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を含む）のうち、専門演習、実験、集中や実技を伴う科目、全学共通カリキュラム言語科目を除外した科目とした。

2011年度は、基本方針により「学部等の必要性に応じた選定」により実施した（詳細はp.5参照）。各学部等の選定方針は、下表の通り。

学部等	科目選定方針
文学部	(1) 各学科・専修の導入教育（初年次教育）科目 ①1年次必修科目 ②1年次で履修可能な科目 ③2年次必修科目 ④2年次で自動登録となる科目 (2) 文学部基幹科目 (3) 各学科・専修で必要と認める科目
経済学部	(1) 「講義科目1教員1科目」の調査は実施しない (2) 本年度については原則後期に実施する (3) 共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の1年次科目（それに直接接続する科目を含める場合もある）についてアンケートを実施する
理学部	(1) 数学科では新カリキュラム（2010年度より移行）の有効性を検証するために、新カリキュラムにおける新規に設計した必修科目・選択必修科目について、定点観測（毎年、同じ科目で調査）を行う (2) 物理学科では原則として複数担当科目以外の全ての講義科目について、教員一名あたり複数の科目にならないように科目を選定し、経年変化を見る為になるべく毎年同じ科目について、アンケートを実施する (3) 化学科では、原則として複数教員担当科目をのぞくすべての講義科目について、経年変化を調査するために、毎年同じ科目のアンケートを実施する (4) 生命理学科では授業評価に対する改善策の具体的効果を継続的に検証するために、2011年度も同じ科目について授業アンケートを実施する (5) 共通教育科目では独自にアンケートを行うため実施しない
社会学部	(1) 必修科目、選択科目は原則としてすべて実施する (2) 後期および通年開講の講義科目で、1教員1科目となるように選定作業を行う (3) 産業関係学科の科目は実施しない
法学部	(1) 3年に1回全教員（専任・兼任）について、1教員1科目を原則に行う (2) (1)を行わない年度については、本学で初めて授業を開講する教員、およびアンケートの実施を希望する科目を対象に行う ※本年度は(2)が該当する
経営学部	「演習」を除く全科目で実施する
異文化コミュニケーション学部	コミュニケーションセミナーを除く必修科目のうち、共通シラバスを用い、授業の目的および内容に共通性があり、複数コマ開講されている科目
観光学部	(1) ひとりの教員に1科目以上を対象とする (2) 学部専任教員に関してはすべての担当科目を対象とする。ただし、「***1」「***2」をペアで担当している場合には、「***1」のみを対象とする (3) 専門演習、実験、実技を伴う科目は対象としない (4) 複数教員担当科目は対象としない (5) 集中講義は対象としない
コミュニティ福祉学部	(1) 後期科目で実施する (2) 1教員1科目以下の実施を原則とする (3) 資格科目・新規科目を優先する (4) 演習科目は対象外とする (5) 昨年度実施科目を優先する
現代心理学部	(1) 「学部共通選択科目（旧カリ「総合展開科目）」全科目 (2) 初年次教育科目 (3) 教職関連科目を除く講義科目すべて。このほか、共通シラバスにより展開される一部の演習科目
全学共通カリキュラム	全カリ総合Aのうち、後期開講の講義系科目を担当する教員1名につき1科目の実施とする
学校・社会教育講座	(1) 履修者5名以下が予想される科目は対象外とする (2) 教職課程は「講義科目1教員1科目」を原則として実施する (3) 他課程は、今年度、特に授業評価を要する重点的科目に限って、アンケート実施する

2-4 実施科目数

実施科目数は前期 304 科目、後期 677 科目、合計 981 科目であった。例年と比較し、前期の実施科目数が少ない。これは東日本大震災の影響で授業時間が減少したことを受け、学部等の科目選定の際に考慮するよう依頼したためである。(詳細は p.5 参照)

実施予定科目数は、前期 312 科目、後期 696 科目、合計 1,008 科目であったので、全学の実施率(実施科目数/実施予定科目数)は 97.3% (981/1,008)、所見票提出率は 76.7% (752/981) となった。

科目開設学部等	実施 予定 科目数	実施学期内訳		実施 科目数	実施学期内訳		所見票 提出数	実施学期内訳	
		前期	後期		前期	後期		前期	後期
文 学 部	120	6	114	111	4	107	88	4	84
経 済 学 部	66	—	66	66	—	66	57	—	57
理 学 部	91	47	44	91	47	44	79	38	41
社 会 学 部	75	—	75	74	—	74	61	—	61
法 学 部	11	5	6	10	5	5	9	5	4
経 営 学 部	187	94	93	181	92	89	119	62	57
異文化コミュニケーション学部	18	12	6	18	12	6	14	9	5
観 光 学 部	103	66	37	102	65	37	69	43	26
コミュニティ福祉学部	42	—	42	42	—	42	36	—	36
現 代 心 理 学 部	105	49	56	101	47	54	70	36	34
全学共通カリキュラム	132	—	132	129	—	129	97	—	97
学校・社会教育講座	58	33	25	56	32	24	53	30	23
合 計	1,008	312	696	981	304	677	752	227	525

注) 通年科目で前期と後期で異なる科目担当者がそれぞれアンケートを実施した場合は、前期 1 科目および後期 1 科目としてカウントした。

2-5 実施期間

実施は、「①授業が進行した後半の時期が好ましい」、「②試験の時期は避けること」から、下記の期間とした。下記期間内に実施できない場合は翌週に実施した。

前期 : 2011年 7月1日(金) から 7月7日(木)

後期 : 2011年 12月5日(月) から 12月10日(土)

2-6 回答者数

アンケート実施科目の延べ回答者数を、科目の開設学部等別に下表にまとめた。参考のために、履修者数も表に載せた。

科目開設学部等	前 期		後 期		合 計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	80	67	6,498	4,308	6,578	4,375
経 済 学 部	—	—	3,614	2,404	3,614	2,404
理 学 部	3,656	2,499	2,946	1,594	6,602	4,093
社 会 学 部	—	—	10,383	5,130	10,383	5,130
法 学 部	1,583	906	981	470	2,564	1,376
経 営 学 部	8,950	5,512	7,671	4,433	16,621	9,945
異文化コミュニケーション学部	269	241	130	120	399	361
観 光 学 部	7,059	4,662	3,503	2,193	10,562	6,855
コミュニティ福祉学部	—	—	5,271	2,969	5,271	2,969
現 代 心 理 学 部	5,523	3,459	4,977	2,679	10,500	6,138
全学共通カリキュラム	—	—	21,937	11,558	21,937	11,558
学校・社会教育講座	2,507	2,100	1,268	974	3,775	3,074
合 計	29,627	19,446	69,179	38,832	98,806	58,278

2-7 「所見票」の公開

所見票（科目別の集計結果および科目担当者による所見）は、イントラネット上で閲覧に供している。加えて、「所見集」としてまとめ、池袋図書館および新座図書館においても学内者の閲覧に供している。

3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック

3-1 科目担当者

担当科目の集計結果（下記①、②、③）をアンケート実施1～2ヶ月後に「所見票入力システム」上に掲載した。

- ①集計結果票（p.16 参照）
- ②「記述による評価」一覧票
- ③アンケート元データ

これを基に、科目担当者には所見票の執筆を依頼した。

3-2 学部等

以下の方針で、集計結果を提供した。

1) 集計の方針

- ①学部等によって科目選定方針が異なるため、集計・分析は学部等別に行い、全学での集計や学部等間の比較、昨年度との比較は行わない。
- ②学部等が独自に設定した基準でアンケート実施科目をグループ化し、科目間の比較や全体傾向を把握するグループ集計を実施する。グループ集計の実施の有無は学部の判断に委ねる。

2) 集計内容

①回答者数・回答率

アンケート回答者を学部等別、学年別に集計した。また、アンケート実施科目の延べ履修者数と延べ回答者数を集計し、学部等別に回答率を算出した。（資料編 p.53 参照）

②学部等別平均値

設問項目別に平均値を算出し、回答割合を帯グラフで示した。また、学科等別、授業規模別、学年別の平均値を算出した。（学部等別平均値は、資料編 pp.54-65）

③設問項目間の相関

相関係数を学部等別、学科等別に算出した。学部等別の相関においては、IV総合評価、特にIV4「この授業を受けて満足した」を中心に、他の設問項目との関連をみた。

④グループ集計（実施学部のみ）

アンケート実施科目を学部等の指定によりグループ化し、設問ごとに回答割合を帯グラフで示した。また、設問項目別平均値をレーダーチャートと一覧表で示した。（pp.17-18 参照）

学部等には、上記「2) 集計内容」と、科目担当者が執筆した所見票を送付し、学部等総評の執筆を依頼した。

2011年度後期 立教大学授業評価アンケート 集計結果票

科目コード	JHK01	開講曜日	火	担当者	立教 太郎	履修者数	60
科目名	授業評価01	開講時限	3	教室	1111	回答数	56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー	平均
回答者数、()内はパーセント							1から5の数字の平均

*II-7)、8)は「該当しない」も含む

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満)	36 (64%)	15 (27%)	4 (7%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	4.54
2) この授業に積極的に参加した	16 (29%)	20 (36%)	14 (25%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.82
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8 (14%)	14 (25%)	19 (34%)	9 (16%)	6 (11%)	0	0	3.16
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7 (13%)	22 (39%)	14 (25%)	10 (18%)	3 (5%)	0	0	3.36
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	16 (29%)	25 (45%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	3.95
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)	4 (7%)	3 (5%)	7 (13%)	17 (30%)	25 (45%)	0	0	2.00

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	23 (41%)	23 (41%)	9 (16%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	4.21
2) 各回の授業内容の量が適切だった	14 (25%)	30 (55%)	8 (15%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.00
3) 各回の授業のねらいは明確だった	17 (30%)	23 (41%)	12 (21%)	2 (4%)	2 (4%)	0	0	3.91
4) 各回の授業内容は明確だった	17 (30%)	26 (46%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.00
5) 十分な静粛性が保たれた	42 (75%)	13 (23%)	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.73
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	19 (34%)	25 (45%)	8 (14%)	4 (7%)	0 (0%)	0	0	4.05
7) 板書のしかたが適切だった	8 (18%)	14 (31%)	16 (36%)	5 (11%)	2 (4%)	6 (11%)	5 (9%)	3.47
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	6 (13%)	6 (13%)	26 (57%)	3 (7%)	5 (11%)	5 (9%)	4 (7%)	3.11
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	21 (38%)	19 (34%)	10 (18%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.98

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

1) 自分にとって新しい考え方・発想	22 (39%)	20 (36%)	6 (11%)	8 (14%)	0 (0%)	0	0	4.00
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	22 (40%)	26 (47%)	4 (7%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.22
3) 自分で調べ、考える姿勢	13 (23%)	21 (38%)	13 (23%)	8 (14%)	1 (2%)	0	0	3.66
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	25 (45%)	23 (42%)	6 (11%)	1 (2%)	0 (0%)	1	0	4.31

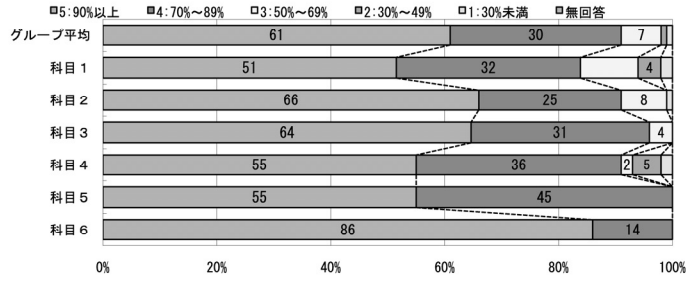
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) わかりやすい授業だった	25 (45%)	19 (34%)	8 (14%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14
2) 授業全体の目標が明確だった	22 (39%)	21 (38%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.09
3) 学問的興味をかきたてられた	27 (48%)	14 (25%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.14
4) この授業を受けて満足した	27 (48%)	15 (27%)	10 (18%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14

設問別帯グラフ

(5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない 0:該当しない(Ⅱ-7,Ⅱ-8のみ) 無回答)

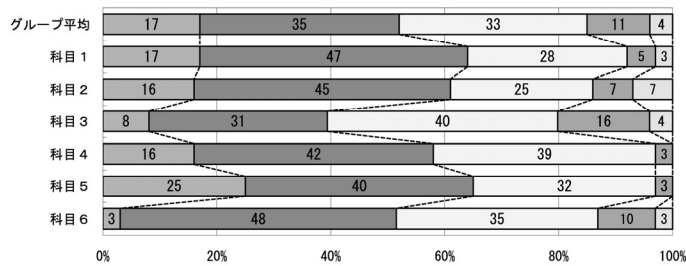
I-1 授業全体を通じての出席率



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	4.6	-
科目1	19	4.3	-
科目2	15	4.6	-
科目3	20	4.6	-
科目4	21	4.4	-
科目5	18	4.5	-
科目6	20	4.9	-

*「無回答」は除く

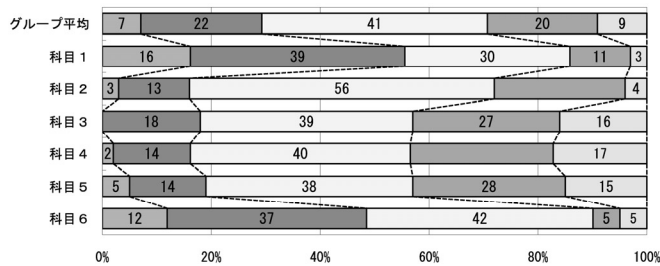
I-2 この授業に積極的に参加した



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.6	-
科目1	18	3.7	-
科目2	15	3.6	-
科目3	20	3.2	-
科目4	21	3.7	-
科目5	18	3.9	-
科目6	20	3.4	-

*「無回答」は除く

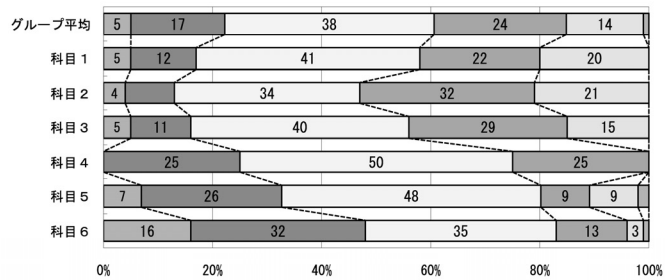
I-3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.0	-
科目1	19	3.5	-
科目2	15	2.7	-
科目3	20	2.6	-
科目4	21	2.6	-
科目5	18	2.9	-
科目6	20	3.6	-

*「無回答」は除く

I-4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした

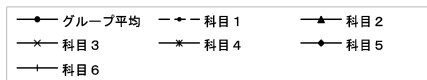
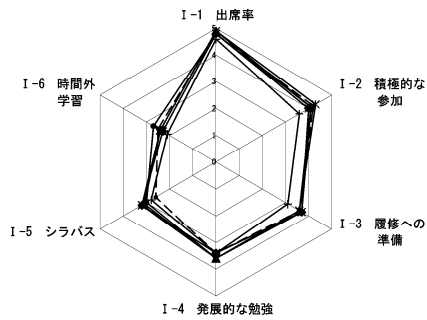


	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	111	2.9	2
科目1	19	2.6	-
科目2	15	2.4	-
科目3	20	2.6	-
科目4	21	3.0	-
科目5	17	3.1	1
科目6	19	3.5	1

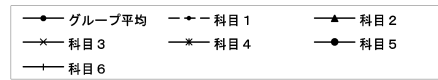
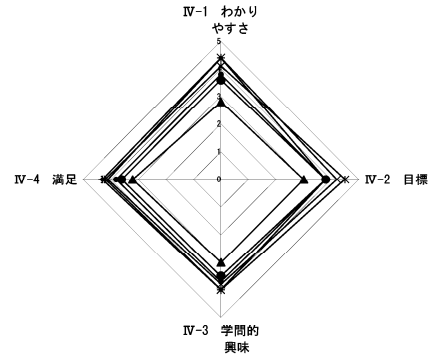
*「無回答」は除く

平均値のレーダーチャート

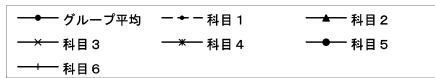
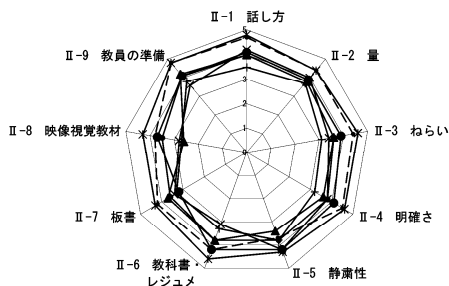
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



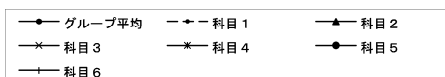
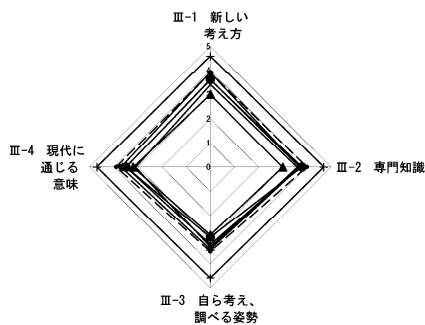
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。



II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。



5段階評価

- 5: 大いにそう思う
- 4: そう思う
- 3: どちらともいえない
- 2: あまりそう思わない
- 1: そう思わない

< I-1 >

- 5: 90%以上
- 4: 70から89%
- 3: 50~69%
- 2: 30~29%
- 1: 30%未満

< I-6 >

- 5: 3時間以上
- 4: 2~3時間
- 3: 1~2時間
- 2: 1時間未満
- 1: 0時間

4. 学部等総評

学部等総評は、科目ごとの集計結果、各教員の執筆した所見票および学部全体の集計結果をもとに、下記を基本形として、各学部等が執筆した。

<構成の基本形>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. 担当教員の所見票に対するまとめ（「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ、「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ、「改善に向けた今後の方針」のまとめ）
4. 学生からの意見（記述による評価）の集約（「肯定的評価として多い意見の集約」、「否定的評価として多い意見の集約」）
5. 今後の改善に向けて

4-1 文学部

1. 科目選定方針とねらい

2011 年度は以下の方針で科目を選定した。例年通り、1 年次、2 年次の導入教育を主要な対象としている。

(1) 各学科・専修の導入教育（初年次教育）科目

- ①1 年次必修科目
- ②1 年次で履修可能な科目
- ③2 年次必修科目
- ④2 年次で自動登録となる科目

(2) 文学部基幹科目

(3) 各学科・専修で必要と認める科目

2. 集計データにみられる結果のまとめ

合計 111 科目においてアンケートを実施した。回答率は 66.51% で全学平均より約 7.5% 近く高くなっている。学年別の回答数は 1 年次 1,787 名、2 年次 1,228 名、3 年次 834 名、4 年次 437 名、不明 89 名となっている。導入教育科目を重視するという学部の方針に沿った数値ではあるが、同時に 3 年次生と 4 年次生の声をどうやって拾い上げるかというのが今後の課題であるといえよう。特に 4 年次生に関しては、現状ではゼミ以外に履修登録を行っていない学生も少なくなく、授業評価アンケートとはまた別の形で彼らの要望や不満を聞き取るためのシステムが必要であろう。

設問項目別平均値を見ると、全体的な傾向としては、教員の授業への取り組みに関してはおおむね高い評価が与えられている反面、学生に自ら主体的に学習する姿勢を体得させるまでにはいたっていないことが明らかになる。これはここ数年繰り返し指摘されてきた問題点ではあるが、残念ながら 2011 年度も大きな改善はみられなかった。

具体的には、I「授業への取り組み方」については、I1「出席率」は平均 4.65 と非常に高い数値を示す一方、I3「授業の履修にあたっての準備」、I4「授業をきっかけにした発展的勉強」はそれぞれ 3.31、3.20 と低い数値になっている。さらに I6「授業時以外に学習した時間」にいたっては 2.36 ときわめて低く、授業についての学習を週に 1 時間以上自主的に行った学生は、まことに遺憾ながら全体の 40% 程度しかいなかったということになる。

II「授業の進め方」はおもに教員の授業スキルを問うものであるが、II9「教員の授業準備の周到さ」の 4.21 をはじめとして、おおむね高い値を示している。その中で唯一目につくのが II7「板書のしかた」の 3.44 であるが、これはおそらく教員の板書の仕方といった技術的なことに還元すべき問題ではなく、むしろ教師の話を聞きながら自分で情報を取捨選択してノートを取る能力を、現在の学生が高校までの学習の場で身に付けてこなかったことを意味しているのではなかろうか。

III「授業から得ることができたもの」、IV「授業の総合評価」についても、同様のことが見て取れる。分かりやすい授業で (IV1、3.91)、多くの学生が満足しているにもかかわらず (IV4、3.89)、それが「自分で調べ、考える姿勢」(III3、3.52) には必ずしも結びついていないことが伺える。授業を通じて「自分にとって新しい考え方・発想」(III1、3.91)

には触れたものの、そこから「現代に通じる普遍的な意味」(Ⅲ4、3.66)を引き出すにはいたっていない。要するに、あえて少々意地悪な言い方をすれば、教師の話は新鮮で面白かったけれど、そこで学んだこと(たとえば古典作品)が21世紀初頭の日本に生きる自分自身にとってどのような意味があるのかは、それもまた教えてもらわないと分からないということであろうか。

なお、文学部による設問に関しては、教室の大きさ、受講者数ともにほぼ適切だったという回答が得られている。また、例年のことではあるが、文学部基幹科目において「授業の静肅性」(Ⅱ5、3.37)に問題があることが明らかになった。理由ははっきりしており、大人数科目という構造的なものだが、これもまた数年来まったく改善されておらず、大きな問題であると言わざるをえない。学部全体として何らかの方策を探っていきたい。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

ほとんどの教員が学生からの評価結果を真摯に受け止め、授業の改善の努力をはかっていることが読み取れる。特に授業の進度や教材の難易度、また視聴覚教材や授業外でのCHORUSの使用については、かなりの数の教員が積極的に学生の意見を生かして、授業を興味深くするための工夫を行っている。一方で、学生と教員の意識が根本的にすれ違っている例も散見される。すべてを教師に教えてもらおうとする学生のコメントに対して、それを「甘え」として苛立ちの言葉を記している教員も決して少なくない。主体性とは自分の内側から出てくるから主体性なのであるが、いまや教員は学生の主体性をどうやって外側から促すかという困難な課題に直面しているといえよう。

4. 今後の改善に向けて

以上指摘してきたような傾向はおそらく立教大学文学部にのみ見られるものではなく、現在の日本社会における高等教育一般の問題を示していると思われる。従って、問題はひとえに個々の教員の授業スキルにのみ帰すべきことではなく、むしろ構造的な問題だと一応は理解すべきであろう。とはいえ、担当教員の所見からもはっきりと見て取れるように、個々の教員は授業の中で学生の積極的な関心を引き出すための様々な工夫、仕掛けを行っていることも事実であり、そのことは本アンケートの全体として良好な評価にも反映していると考えられる。本学のFD制度が一定の成果を上げていると考えられる所以である。

学生の自主性を涵養するためには、一見逆説的ではあるが、今よりも「不親切な」授業をする勇気を我々教員の側が持つ必要があるかもしれない。分かりやすい授業であるにもかかわらずではなく、むしろそれ故にこそ、特別なモチベーションをもたない、悪く言えば消費者マインドに染まった学生にとっては、学習が教室の内部で完結してしまうとも考えられる。FDを真に教員と学生との相互的かつ能動的な関係性の中で捉えるならば、ここは少し発想を転換して、教師の側が授業中の「サービス」をある程度自制することにより、学生に受け身の態度で受講することを不可能にする必要があるのではなかろうか。主体的な学びの姿勢が高等教育には不可欠であることを、今後も折あるごとに口を酸っぱくして学生に訴えていかねばならないであろう。

4-2 経済学部

1. 科目選定方針とねらい

2011年度は以下の方針で科目を選定した。

- (1) 「講義科目1 教員1科目」の調査は実施しない。
- (2) 本年度については原則後期に実施する。
- (3) 共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の1年次科目（それに直接接続する科目を含める場合もある）についてアンケートを実施する。

2011年度のアンケート実施科目は、「経済学」、「経済数学入門」、「簿記」、「統計学2」、「情報処理入門2」、「経済情報処理B」、「政策情報処理B」、「財務情報処理B」、「基礎ゼミナール2」の9科目である。「学部等による設問」として、全科目に対して「教室の規模・設備の適切性」を設問し、これに加え基礎ゼミナール2では「英語力の向上」、「英語文献への視野の拡大」を、情報処理系科目では「情報処理入門（1年次前期科目）は情報処理系科目の学習に役立っているか」、「表計算ソフトの活用」、「プレゼンテーションファイルの作成」、「WEB上からの経済資料・統計資料の入手」の習熟等を問う経済学部独自の質問項目を追加した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

66の授業においてアンケートが実施された。アンケート実施科目の総履修者数は3,614名であり、その内2,404名が調査に回答した。回答率は66.52%で、調査全体の平均値(58.98%)を上回っている。アンケートに回答した学生を学年別にみると、1年生が1,972名、2年生が245名、3年生が85名、4年生が48名、不明が54名である。

今回の調査集計結果をみるとほとんどの項目で3.5以上の平均値を示しており（30項目中25項目）、総じて授業に対する満足度や教育効果に対し高い評価が得られたといえよう。このような結果が得られた理由の一つとして、例えば、基礎ゼミナールや情報処理系科目では年に数回の担当者会議を実施し、授業の進め方に対する意見交換や授業内容の平準化を図る等、教員サイドからの意欲的な取り組みがあげられる。

アンケート項目のうち4.00以上が7つあり（全30項目中）、科目選定方針が類似している2009年度の調査が3つだったことと比べると二倍以上になっている。上記7項目のうち「授業全体の出席率」、「授業への積極的な参加」、「教室規模・設備の適切性」については、2009年度と共通しているが、今回の調査で大幅な改善が認められた主な項目は以下の通りである。

<Ⅱ 授業の進め方>

- ・ 「聞きやすい話し方だった」：4.00（2009年度は3.77）
- ・ 「教員は授業の準備を周到に行っていた」：4.14（2009年度は3.94）

反対に、3.00以下の項目は、「授業時以外に学習した時間」（同2.54）のみである（2009年度は同項目を含み2つ）。しかし、当該項目は、2009年度；2.63、2008年度；2.15、2007年度；2.05 とかねて低い傾向にあり、むしろここ二、三年は改善されてきたともいえる。なお、2009年度において3.00以下だったもうひとつの項目である「シラバスは受講に役立った」（同2.93）は、3.13に改善されている。これは共通シラバスと実際の授業における個々

の担当教員の授業が進め方の齟齬が解消されつつあることを示している。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

経済学、経済数学入門、簿記、統計学2、情報処理入門2、経済情報処理B、政策情報処理B、財務情報処理B、基礎ゼミナール2について、科目及びクラスを9つのグループに区分し、グループ集計を実施した（基礎ゼミナール2については担当教員別[助教、兼任講師、助教以外の専任教員]、それ以外については科目別）。これらは共通シラバスに基づき複数コマ開講されており、担当者毎のばらつきが低いことが望ましいと考えられる。

3-2 経済学（グループ1）

グループ全体で見た場合、[I この授業へのあなたの取り組み方について]を除き、ほぼすべての設問の平均値が3ポイント台後半以上を示している。2009年度調査より全体的にポイントは向上しており、授業方法の工夫と改善が行われたことが窺える。他方、クラスによる数値の差異が相対的に大きく、これが科目担当者の授業内容や方法に起因するかどうか個別に確認し対応することが必要だといえる。

3-3 経済数学入門（グループ2）

二科目で一つのグループを形成したため担当教員による数値の違いが目立つ結果となった。それでも両科目ともに4.00以上となった項目が8つあるなど総じて高いポイントを示している（全24項目中）。また、平均値をみても他のグループと比べて極端に低いものはみられない。

3-4 簿記（グループ3）

大半の設問項目で平均値は3.50以上となっている（24項目中16項目）。4.00以上の項目も10項目ある。特に、[II この授業の進め方は…]は9項目中7項目において4.00以上となっており、授業に対する満足度や教育効果に対し高い評価が得られたことが確認できる。他方、簿記で問題なのは、クラスにより極端な差異が生じていることである。経済学と同様に簿記においても、これが科目担当者の授業内容や方法に起因するかどうか個別に確認し対応することが必要だといえる。

3-5 統計学2（グループ4）

二科目で一つのグループを形成しており、担当教員による数値も類似している。平均値が4.00以上となった項目が7つあるなど総じて高いポイントを示している（全24項目中）。特に、[II この授業の進め方は…]、[III この授業から得るものができたこと]、[IV 総合的にみてこの授業は…]については、ほぼすべての項目で3点台後半以上となっており、授業に対する満足度や教育効果に対し高い評価が得られたことが確認できる。

3-6 情報処理入門2（グループ5）

大半の設問項目で平均値は3.50以上である（28項目中24項目）。4.00以上の項目も7

つある。これは他の科目群と比べても極めて高い数値である。担当者別の数値も近似しており、クラスによる極端な差異は見出すことができない。よって、授業内容と教育効果は科目全体を通じて平準的に達成できていると考えられる。学部等による設問も総じて高いポイントを示している。共通テキストの利用や担当者間での授業情報の共有化が効果を発揮したものと考えられる。

3-7 経済情報処理B、政策情報処理B、財務情報処理B（グループ6）

情報処理入門2と同様に大半の項目で平均値は3.5以上と高い数値を示している（28項目中21項目）。項目によってはクラスでやや差異が見られるが、設問全体を通じて見れば有意な差異とは言い難い。

3-8 基礎ゼミナール2（グループ7、8、9）

平均値が3.50以上となった設問数は各グループともに同一の23項目であった。（全26項目中）。このことから、クラス毎のばらつきがなく授業に対する満足度や教育効果に対し高い評価が得られたことが確認できる。この点、情報処理系科目と同様に共通テキストの利用や担当者間での授業情報の共有化が効果を発揮したものと考えられる。他方、平均値が4.00以上の項目に焦点を当てると、グループ7（助教）：19項目、グループ8（兼任講師）：5項目、グループ9（助教以外の専任教員）：16項目で極端な差異が生じている。特に、[Ⅱこの授業の進め方は…]のアンケート項目における相違が顕著である。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

所見票への記述量についても教員により大幅な差異が見受けられる。板書のしかた、静粛性の確保、話し方（声の大きさ、スピード）等について改善を求める意見が多く、ほとんどの教員が学生からの指摘を真摯に受けとめ、次年度に向けての改善の努力をする姿勢を示している。学生からの要望（出席の取り方、レジュメ配布の方法）についても可能な限り対応しようと試みている。他方、相反する意見が出され（例；講義がわかりやすいという意見がある一方で、難しすぎるという意見もあり）、返答に苦勞している様子も窺える。

5. 今後の改善にむけて

基礎ゼミナール2や情報処理系科目では、数年来取り組んできた科目共通テキストの作成・利用、担当者間での授業情報の共有化が功を奏し、クラス毎のばらつきが大幅に改善された。今後もこの方針を踏襲し、さらなる改善に役立てていきたい。他方、このような共有化が行われていない科目では、クラスによるばらつきが散見される。この点、今後の課題だといえよう。

4-3 理学部

1. 科目選定方針とねらい

2011年度は、各学科の方針に基づき、科目の選定を行った。各学科とも、経年変化を調査するために、毎年なるべく同じ科目を選定する方針であり、原則として、数学科は新カリキュラムにおける新規に設計した必修科目・選択必修科目を、物理学科・化学科は、複数担当科目以外のほぼ全ての講義科目を（ただし、物理学科については教員一名あたり複数の科目にならないように科目を選定）、生命理学科は、昨年度実施科目を選定した。共通教育科目については、独自にアンケートを行うため実施しなかった。なお、設問項目については、理学部独自の3つの設問項目を継続した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

理学部の回答率は62%であり、全学平均58.98%よりわずかに高い。また、回答者は、1年生1406名、2年生1436名、3年生872名、4年生289名となっており、低学年が中心である。約7割の学生が、授業に積極的に参加した（I2）に「大いにそう思う・そう思う」と答えているが、十分な準備（I3）や授業をきっかけにした発展的な勉強（I4）で「大いにそう思う・そう思う」と答えた学生は4割にも満たず、やや受け身の学習傾向が見える。出席率（I1）は4.73（8割以上の回答者が90%以上の出席）と高いが、授業時以外に学習した時間（I6）は、3時間以上（6.4%）、2～3時間（10.0%）、1～2時間（31.5%）、1時間未満（35.4%）、0時間（16.7%）となっており、不十分である。

2010年度の理学部のデータと比較すると、それほど大きな変化は見られない。変動幅の大きい方から3つ挙げると、映像視覚教材の使用（II8）、十分な静粛性（II5）、板書のしかた（II7）であり、いずれも上昇しているが、II7、II8については、2011年度から「該当しない」という選択肢が追加されたことが影響しているのかもしれない。

科目の性格等が異なるため単純な比較はできないが、学科別で差が見られる項目を挙げると、授業への参加（I2）は数学科が高く、シラバス（I5）については数学科が低い。また、授業時以外の学習時間（I6）については数学科と物理学科が高かった。授業量の適切性（II2）は数学科が低く、静粛性（II5）は生命理学科が4.10と高い。また、総合的評価（IV）については、化学科と生命理学科がやや高かった。理学部独自の設問の教員の質問への応答（V1）、学生同士の共同の勉強（V3）については数学科の評価が高い。教員の質問への応答（V1）の4.35については、1年生の演習を教員3名体制で臨んだ成果かもしれない。

学年別の比較では、ほとんどの項目において、学年の進行につれてポイントが上昇しており、「積み上げ型」の理学部カリキュラムの特性を反映しているようである。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

項目II、III、IV、Vについては、ほとんどの項目の平均が3.5以上であり、教員も概ね肯定的な評価と捉えている。一方、項目Iに関連し、学生の授業時以外の学習時間の少なさや、自主的な学習の欠如への懸念が多くの教員から指摘されていた。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業内容が多い、難しすぎるといった評価に対しては、「内容を削るのではなく、理解の障害を取り除く工夫を検討する」旨の記述や、「レジюмеを読むだけで理解できないのは当然であるから、学生の自助努力を期待する」と言った趣旨の所見が見られた。板書や声量などに関する要望については、それぞれ、改善を検討する旨の記述があった。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

学生の自主的な学習を促すためには、学生の興味を引くことが重要であるという観点のもと、授業目的の明確化や、例の提示など、授業運営に関する創意工夫について、様々な記述が見られた。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

丁寧でわかりやすいという意見や、板書のしかた、レジюмеやパワーポイントの使用、質疑応答（教員、TA、SA）などについての肯定的な評価が多くあった。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

授業の難易度、量、スピード等について、難しすぎる、多すぎる、早すぎるといった記述が多く見受けられる。ただし、同一の授業に対しても、逆にスピードが遅すぎるなど、正反対の評価も見受けられる点に注意が必要である。その他、板書のしかたや声量、パワーポイントの準備・使い方、レジюмеの準備・質の向上の要望などが多く寄せられていた。

5. 今後の改善に向けて

例年と同様に、学生からは「内容が難しすぎる」「授業の量が多すぎる」といった記述が多く見られた。しかし、理学部は積み上げ型のカリキュラムであるため、多くの科目では、授業内容を一部省略することは困難である。また、論理的思考能力を高めることも重要な目的の1つであるから、「内容が難しすぎる」というのは必ずしも悪い評価とはいえない。とはいえ、あまりの難しさに学生が学習意欲を喪失することを防ぐための配慮も必要であるから、授業のわかりやすさ（Ⅳ1）と統計上強い相関が見られる項目（聞きやすい話し方（Ⅱ1）授業のねらいの明確さ（Ⅱ3）授業内容の明確さ（Ⅱ4）板書のしかた（Ⅱ7））の充実を図り、学生の自主的な学習を促すことが重要であると思われる。

また、板書や声量などに関しての要望については、各教員によって改善の努力が継続されている様子がうかがえるが、講義中に一言言えば改善されるようなものも多く見受けられるので、日頃から学生とのコミュニケーションをしっかりと取ることも大事である。

4-4 社会学部

1. 科目選定方針とねらい

社会学部では、2011年度の授業評価アンケート対象科目の選定方針を、以下のように定めた。

- ①必修科目、選択科目は、原則としてすべて実施する。
- ②後期および通年開講の講義科目で、1教員1科目になるように選定作業を行う。
- ③産業関係学科の科目は実施しない。

①は、必修・選択科目群が学部教育カリキュラムの基盤をなす科目と位置付けられ、その多くが導入期にあたる初年次・2年次における履修を想定しており、これらの科目に対する学生の評価は、今後の基礎教育の改善に向けて極めて重要な意味を持つと考えて方針としたものである。②は、東日本大震災の影響で前期講義科目が変則的授業運営を余儀なくされたため、それらを除外したうえで、現行の授業評価アンケートの主な目的である「各教員が行う授業の仕方や内容の改善」を踏まえ、少なくとも各教員が1つの講義担当科目において実施することとしたものである。③は、産業関連学科は2006年度からの学部再編において学生募集を停止しているという理由によるものである。

2. 集計データにみられる結果

2-1 授業規模別

従来、大規模授業であるほど満足度や評価が低下する傾向が指摘されてきたが、2010年度に続き、その傾向は是正されてきている。設問中、「十分な静粛性が保たれた」は、50名以下では4.54、51～100名では3.94、101～150名では3.60、151名以上は3.27と履修者数が増えるに従い、評価が下がっていた。しかし、それ以外の20項目では50名以下と151名以上の差は0.2ポイント以内であった。51～100名、101～150名のデータも含め、昨今の傾向として、授業規模と満足度や評価とは、以前ほど強い関連が見られなくなっているのではないか。

2-2 学年別

授業出席率は、学年が進むにつれて低下しているが、その他のほぼすべての評価において学年が進むにつれて上昇している傾向が見られた。特に、カテゴリーⅢ「この授業から得るものができたこと」では、Ⅲ1「自分にとって新しい考え方・発想」が1年生3.61、2年生3.75、3年生3.80、4年生3.97、Ⅲ4「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」が1年生3.52、2年生3.66、3年生3.83、4年生3.96と着実にポイントがあがっている。大学での勉学を通じて、学問のもつ意味・魅力への理解が深まっていることが読み取れる。

2-3 学科

「この授業を受けて満足した」が社会学科3.84、現代文化学科3.65、メディア社会学科3.72であり、学科間での顕著な差異は示されなかった。同様にすべての設問において各学科間の差異はあまりなかった。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

おおむね教員の工夫を反映した結果と一致するとの肯定的意見が多かった。一方、事前・事後学習の程度によって、理解が異なるとの指摘も多く、学生に自主的な学習を促す内容の意見が多かった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

社会学部では2011年度から学部予算によるゲストスピーカー制度の充実を図った。それも含め、ゲストスピーカーの導入が高評価となったとの意見が、視聴覚教材の活用などとともに多かった。また、体育会活動に対して「授業優先を徹底してほしい」との意見があり、再度、全学的に徹底すべきものとする。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

学生からの記述を受け、真摯に改善に取り組むとの意見が多数を占めた。一方、大人数授業のため、グループワークなどの形式が採用できず、授業方法が制約されるとの意見もあった。また、「教師陣がもっと真剣に、駄目な学生に対しては容赦なく単位を与えないという覚悟をもってやらなければ、立教大学は今後沈むことはあっても浮かぶことは無いでしょう。校友として真剣に憂慮します」「教えるのはサービスではありません。学ぶのはエンターテインメントではありません。教える者と学ぶ者の真剣勝負を望むべきです」との厳しい意見もいただいております、今後の検討に活かしていきたい。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

個々の授業の内容について「現代の社会に必要な知識を学ぶことができた」「先生が授業に対してとても準備をして下っているのが伝わってきました」など、好意的なコメントが多く、教員にとっても有益な意見が目についた。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

最も多かったのが授業の静粛性であり、他学部の受講生から「社会学部の授業がこんなにもうるさいと思いませんでした」との意見まであった。その他、パワーポイントやレジュメの効果的使用、マイクの使い方なども複数の意見があった。ただ、少数ではあるが、教員に対する誹謗中傷とも受け取れるコメントがあり、授業改善に資する意見を記載することの徹底が必要と感じた。

5. 今後の改善に向けて

授業の静粛性については学部内で議論するテーマとして認識しており、具体的な改善方策を検討していきたい。社会学部では2012年度から新カリキュラムに移行した。学科間の垣根を下げ、学部としての導入教育に力点を置いているが、この新カリキュラムの進展にあわせて、さらなる授業改善が図れるように、本アンケートも活用していきたい。

4-5 法学部

1. 科目選定方針とねらい

法学部では、2011年度より、全教員（専任・兼任）について授業評価アンケートを行うのは3年に1回とし、それ以外の年度は、本学で初めて授業を開講する教員およびアンケートの実施を希望する科目を対象に行うことにした。2011年度は、それ以外の年度に該当し、合計10科目について授業評価アンケートを行った。毎年度の全教員についての授業評価アンケートの実施をとりやめたのは、以下の理由による。すなわち、授業評価アンケートも回を重ねるにつれて、各教員は、アンケート結果に対して、授業改善に取り組むという姿勢が浸透した。さらに、毎年度のアンケート結果は、ほとんど各教員の想定内に収まっている。そのため、学部内において、貴重な授業時間を削ってまで、毎年度、授業評価アンケートを行うことに対して、疑問の声が出されたからである。

2. 集計データから見られる結果のまとめ

「1.科目選定方針とねらい」で述べたとおり、2011年度の授業評価アンケート実施科目は10科目と、従前の年度に比べて、画期的に少ない。しかし、以下に述べるとおり、集計データから見る限り、全教員について授業評価アンケートを行った従前の年度と、結果の傾向は、あまり変わらない。ただし、今年度の回答率は53.67パーセントであり、全学平均（58.98パーセント）と、従前の年度のような差はない。ちなみに、2010年度は、全学平均値が55.51パーセントであるのに対して、法学部の回答率35.89パーセントであった。これは、授業評価アンケート実施科目において、受講者数の多い1年生担当科目が3科目を占めた結果であると思われる。したがって、回答率の高さから、出席率が低いという従前の問題が改善されたとはいえないであろう。以下、結果について、見てみたい。

まず、設定項目別の平均値を見ると、平均値3以下の項目が、I3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、I4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、I6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」であった。これらの項目は、いずれも学生の授業に対する取り組みに関するものであり、受動的な学習態度を表すものといえる。大人数授業であることも理由の一つであろう。しかし、それにもまして、授業を「理解する」という姿勢が学生に希薄なことも、その理由の一つと考えられる。

学年別平均値を見ると、1年生と2年生以上で、II2「各回の授業内容の量が適切だった」、II3「各回の授業のねらいは明確だった」、II4「各回の授業内容は明確だった」、II5「十分な静粛性が保たれた」の各項目で、差が大きい。すなわち、これらの項目において、2年生以上では、いずれの学年も、4.00以上であるのに対して、1年生では、3.00台半ばにとどまっている。特に、II5「十分な静粛性が保たれた」の項目では、0.6以上の差がある。これは、2年生になると、大学の授業に慣れてくることを示しているものと思われる。さらに、I5「シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った」では、1年生のポイントが際立って低い。この原因は判然とはしないが、高校生気分が抜けきらない1年生は、授業において、教師から、一挙手一投足の指示が得られることを望む傾向があるのではないだろうか。

なお、I1「授業全体を通じての出席率」は2010年度と同様に4年生が相変わらず低い。特に、1年生と比べると0.7ポイントも低い。さらに、授業評価アンケートに回答する学生

のほとんどは、日頃から授業に出席している学生だと想定できるので、であるとすれば、4年生の実際の出席率は、もっと低いと思われる。

2011年度は、授業規模別平均値は、50名以下と151名以上しかないところ、授業規模が大きくなると聞きやすさだけでなく、その他の項目の平均値も大幅に下がるという傾向は見られない。ただし、Ⅱ5「十分な静肅性が保たれた」だけは、50名以下が4.58であるのに対して、151名以上は3.76である。ただ、今年度は、151名以上の授業は1年生配当科目が多かったために、大人数授業だから十分な静肅性が保たれなかったと、即、結論づけていいかどうかについては留保が必要である。

3. 担当教員からの所見票に対するまとめ

ほとんどの教員が、学生の評価を真摯に受け止め、それに対応した具体的な改善策を提示している。しかし、わかりやすい授業をすることと、学生の自主的、発展的な学習を促すことは、トレード・オフの関係にあるようであり、その両立については、相変わらず、ほとんどの教員が頭を悩ませている。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

授業内容自体に対する記述は少ない。特に、1年生の授業においては、学生の記述は、話す速度やレジュメ・板書の量・わかりやすさ、あるいはパワー・ポイントの出来・不出来に関するものがほとんど占めている。

目新しいものとしては、他の学生のパソコン使用に対する不満があった。授業における学生のパソコン使用は、今後、ますます増えてくると予想されるので、法学部だけではなく、全学で考えるべき問題であろう。また、例年通り、大教室の教室環境——暖房がきいておらず寒い等——に関する苦情が散見される。

5. 今後の授業改善に向けた課題の提示

法学部では、2011年度から、全学の授業評価アンケートとは別に、1年生対象科目である基礎文献講読において、独自のアンケートを実施することにした。1年生を一日も早く高校生から大学生に転換させ、自分の頭で考えることができるようにすることが、従来にも増して急務の課題になっている。そのためには、基礎文献講読の一層の充実が必要だという認識に基づいてのことである。

さて、私学の社会科学系の学部では大人数講義は宿命ともいうべきものである。したがって、学生の自主的な学習を促すためには、演習等の少人数授業に学生を誘うことが肝要である。この点、法学部では、2年生向けの少人数講義が手薄であったが、2012年度から、開講科目数を増やした。これに対して、原則として、3年生以上を対象とする演習は開講科目数自体において不足はない。しかし、全学生の半分程度しか受講していないために、受講者数をどのように増やすかの工夫が必要であろう。

大人数講義においては、静肅を保つことから始まって、各教員は、さまざまな工夫をしている。しかし、大人数講義においては、受講学生の出来や学習意欲にばらつきがあるために、どこにターゲットをおくべきか多くの教員は苦慮している。そんな中で、学生に、

お客様満足度調査と誤解させない授業評価アンケートは、どうあるべきか授業評価アンケートが定着した今、考えるべき課題であろう。

4-6 経営学部

1. 科目選定方針とねらい

経営学部は、例年通り、2～4年次演習を除くすべての科目において実施した。全科目を対象に実施した理由は以下の2点にある。第一に、授業の質を高めるために、「学生による授業評価アンケート」の結果は、授業を担当する教員に対して重要なフィードバック効果をもたらすと考えているからである。第二に、現在、学部として取り組んでいる国際認証評価のために、全科目を対象とした授業評価アンケート実施が望ましいと考えられるからである。このため、可能であれば、今後も、演習を除く全科目を対象に授業評価アンケートを実施していきたいと考えている。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

学生側の授業に対する取り組みを示す6項目については、「授業全体を通じての出席率」は4.71とかなりの高得点であり、「この授業に積極的に参加した」は4.03とそれぞれ高い数値を示し、積極的に授業に取り組んでいたことがうかがえる。一方、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(3.49)、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(3.42)はそれぞれ3.5を下回った。また、「シラバスは受講に役立った」についても、3.41と低い値を示している。シラバスの記述については字数に限りがあるが、その範囲内で、学習計画等に役立つ内容にしていく努力が必要となる。「授業時以外に学習した時間」は、2.61ポイントであり2時間未満の学生が大半であることを示している。授業への積極的な参加は見られるものの、予習・復習などへの意識は必ずしも高いとは言えない結果であった。

授業の進め方については、「板書の仕方が適切だった」の平均3.65ポイントが最低であり、他のすべての項目は3.8ポイント以上という高得点であった。その意味では全体として学生から一定の評価を得ているといえよう。一番高かった「教員は授業の準備を周到に行っていた」については、4.21という高い評価を得ている。ただし、学部として、現状に満足せず、今後、学生からより高い評価を得られるように努力していく必要はある。

授業から得られたものを示す4項目についても、いずれも3.6ポイント以上であった。中でも、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」が最も高く3.97で、「自分で調べ、考える姿勢」が最も低く3.66であった。ただし、演習系科目のうち、グループ集計を行った基礎演習、BL1、BL2では、「自分で調べ、考える姿勢」において最低でも3.9ポイントであり、比較的規模の大きい、講義系科目において、当該項目の評価が相対的に低かったと考えられる。確かに、講義系科目や規模の大きい科目において自ら調べ、考える姿勢を養うのは難しい。大規模で、講義系科目においても、このような姿勢を養成するための工夫が求められる。

総合的にみても評価では、「学問的興味をかきたてられた」3.83ポイントで最低点であり、他の項目は3.9以上であった。その意味では学生の満足度は全体的にみてもある程度は満たすことができていると評価できると思われる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

経営学部では、基礎演習、BL1、BL2の3科目についてグループ集計を行った。理由は、これらの科目が複数コマ展開されており、それぞれ担当教員は違うものの、同一のフォーマットによって開講されているからである。従って、これらの科目については、担当者ごとのばらつきが低いことが望ましいと考えている。

3-2 基礎演習

総合的評価の4項目は、18クラスの平均値がいずれも4.3~4.5と高い評価を受けている。出席率で5.0と最高得点も出ており、学生の積極的参加の様子がうかがわれる。「この授業を受けて満足した」については、1クラスを除き、すべて4.0を超えており、下回った1クラスも3.8であった。これらのことから、クラス間のばらつきもそれほど大きくないといえよう。

3-3 BL1

総合的評価の4項目は、10クラス平均値がすべて3.9以上であり、高い評価を得ているといえよう。「この授業を受けて満足した」の10クラスの平均値が4.0であり、またクラス別にみると、最も高いクラスでは4.2(1クラス)であり、最も低いクラスは3.7(1クラス)であった。クラス間のばらつきはそれほど小さくなく、全体として高い評価を受けたといえる。

3-4 BL2

総合的評価の4項目は、10クラス平均値がすべて4.1以上であり、高い評価を得ているといえよう。また、4項目中の「この授業を受けて満足した」については、10クラス平均で4.1と高い評価を得た。クラス別にみると、一番高いクラスで4.5(1クラス)であり、一番低いクラスで3.8(1クラス)であった。このことから、クラス間のばらつきもそれほどなく、高い評価を得ているといえる。

4. 今後の改善に向けて

総合的評価をみると比較的高い評価を得ているが、演習科目に比して講義系科目の評価は相対的に評価が下がる傾向がみられるので、とりわけ授業規模の大きな講義についての対策を検討する必要があると考える。

具体的にいくつか取り上げると、まず静粛性の評価は、「十分な静粛性が保たれた」が大規模講義では評価が低くなる傾向は否めない。大規模教室の静粛性は、学部開設以来の課題であり、TA、SAの活用、厳しい注意喚起などによりある程度の成果はみられるものの、最も大きな努力課題であると考えられる。静粛性については、個別の教員による取り組みもさることながら、学部全体として、私語を減らす取り組みを行っていく必要がある。教員間の経験交流などのFD活動の活発化を推進するなどの具体的措置の実施も今後の課題である。

また、学生側の授業に対する取り組みを示す 6 項目について、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(3.49)、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(3.42)であり、さらに授業時以外での学習時間が 2.61 ポイントと極端に低い値になっている。これら数値から、授業時には積極的に参加をするが、それ以外の時間では学問から離れてしまっている様子が顕著に表れていると考えることができる。教員の努力とともに学生の意欲的な学習姿勢も期待したい部分はある。

4-7 異文化コミュニケーション学部

1. 科目選定方針とねらい

複数コマ展開必修科目(言語科目を除く)「基礎演習1」「基礎演習2」ならびに「Cultural Exchange」を対象とした。ねらいは、統一シラバスで行っている複数コマ展開必修科目についての評価を得ることで学部カリキュラムの検証の意味合いも持たせることにある。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

実施状況としては、回答率が約90%で、全体平均の約60%をはるかに上回る数値となっている。少人数かつ参加型の必修科目のみでの実施だったことが主な要因であろう。

次に、設置項目別平均値について、各大項目別に述べる。まずは授業への学生の取り組みについてであるが、出席率と授業への積極的参加については高い数値を示しており、多くの学生が授業には前向きな態度で参加していることがわかる。しかし、授業時以外の学習時間は平均して1~2時間程度で、授業準備ならびに授業後の発展的学習については肯定的な回答は授業参加度に比べて低めの値となっている。授業の進め方については、必ずしも該当しない板書の仕方ならびに映像視覚教材の使用を除き全ての項目について数値が4.0近くで半数以上の学生が肯定的評価をしている。授業から得たものについても肯定的評価が多い。自分で調べ、考える姿勢についてはほぼ8割の学生が身に付いたとしており、基礎演習で自主学習を促していることの効果ではないかと考えられる。総合的評価においても7割強の学生がわかりやすかった、と回答している。学問的興味が駆り立てられた、という項目については若干低めではあったものの、学問領域を直接扱っていない科目(基礎演習とCultural Exchange)のみが対象だったことを考慮に入れると、決して低い数値ではないだろう。

3. グループ集計にみられる結果

今回アンケートを実施した全ての科目について、カリキュラム検証のためグループ集計を行った。

3-1 基礎演習1

前年度同様に、基礎演習1(前期)と基礎演習2(後期)のカリキュラムに継続性をもたせた。基礎演習1は、非言語コミュニケーションについて学ぶワークショップと討論を通して発信力を身につける協同学習の組み合わせにレポート執筆の基礎を組み込んだ。授業外学習については十分とは言い難いものの、全般的にみて授業への取り組みに積極的な姿勢がうかがえる結果となり、授業の進め方についても適切に行われていたと言えよう。専門知識の獲得については若干評価が低かったが、新しい考え方を得たことや自分で調べ考える姿勢については7割強の学生が高く評価しており、震災の影響で授業期間が短縮されたことを考えるとその中で最大限の教育効果を出すことができたのではと思われる。

3-2 基礎演習2

基礎演習2(後期)では協同学習を更に発展させ、それらを題材にしたレポート執筆の実践も行った。基礎演習1(前期)同様に全体的には満足度の高い科目となっている。後期に

なっても出席率ならびに参加度は前期同様に高い値を維持しており、授業外学習時間ならびに発展的学習をしたという学生の割合も増えている。また、特に専門的知識の獲得や学問的興味についても前期より評価が高くなっている。1年間を通して段階的に教材の量・難易度を上げ、その結果としてより専門性の高いものを後期に扱えるよう組んだカリキュラムの成果ではないかと思われる。

3-3 Cultural Exchange

異文化理解に関する基礎的な理論を学びつつ、実践を通して異文化対応能力を育成することを目的とする。基礎演習と同様に、出席率ならびに参加度については高い評価となっている一方で、授業外での学習時間、準備学習や発展的な勉強については若干低めとなっている。しかし、授業の進め方や授業で得たものについての評価は一貫して高く、新しい考え方や発想、専門知識の獲得については一定の評価を得ているといえよう。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

前期科目（基礎演習1、Cultural Exchange）については、震災の影響が指摘されている。基礎演習では、授業のねらいの理解や発展的な学習、専門知識や学問的興味についての評価が低めだったのは授業期間の短縮が一因、そして Cultural Exchange では留学生が少ないことで授業目標が不明瞭になった、との指摘があった。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

基礎演習についてはワークショップ関連、協同学習の成果、論文作成の指導方法、そして課題の量に関する記述への所見が主な内容だったことが見受けられる。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

基礎演習1, 2では授業外学習の重要性を認識させる工夫や論文作成指導の組み込み方等についての検討、そして Cultural Exchange では毎年変化する留学生の人数に合わせた複数の授業構成の検討などが挙げられた。

5. 学生からの意見（記述による評価）の集約

5-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

基礎演習1, 2についてはワークショップや協同学習への高い評価が目立った。Cultural Exchange ではディベート等の活動について肯定的な意見が見られた。

5-2 「否定的評価として多い意見の集約」

基礎演習1, 2については課題の量と難易度に関するものが多少あった。Cultural Exchange については留学生との交流機会がかなり限られていることについての指摘がみられた。

6. 今後の改善に向けて

今後の課題としては、授業外でどれだけ学習を促すかが主なものとして挙げられるだろう。毎回の授業の予習を必要とするようなシラバスと、発展的学習を促す授業内容・方法の工夫が重要となるだろう。

4-8 観光学部

1. 科目選定の方針とねらい

次のような方針で授業評価アンケートの実施科目を選定した。

- (1) ひとりの教員に1科目以上を対象とする。
- (2) 学部専任教員に関してはすべての担当科目を対象とする。ただし、「***1」「***2」をペアで担当している場合には、「***1」のみを担当とする。
- (3) 専門演習、実験、実技を伴う科目は対象としない。
- (4) 複数教員担当科目は対象としない。
- (5) 集中講義は対象としない。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

設問の平均値を見ると「授業全体を通じての出席率」は4.6を超え、「この授業に積極的に参加した」は4.0弱であることから、授業への学生の参加自体は高いと言えるのではない。しかし、「この授業に関連して授業時以外に学習した時間」については2.0を少し超える程度であり、1時間未満の学生が7割近くを占めている。また、「この授業をきっかけにして発展的な勉強をした」も3.03と比較的低い値である。予習復習や発展学習の確保が観光学部全体としての課題だと言えそうだ。しかし、「この授業をきっかけにして発展的な勉強をした」の平均値は、2年次が2.03、3年次が2.05、4年次が2.18となっており、学年が上がるごとに逡増している。上級生対象の授業に関しては、予習復習や発展学習についての課題も克服される傾向にあるようだ。上級生対象の授業は少人数クラスだったり、授業で取り上げる内容が具体的事象に基づくものだったりするためだろう。この辺りに、下級生に予習復習や発展学習を実施させるヒントがあるように思われる。

授業の進め方については全体的に高い評価が得られた。大人数クラスになるほど平均値は低くなるが、「教員は授業の準備を周到に行っていた」についてはクラス人数の大小による差があまり見られず、平均値も4.26と高い値である。これらのことは、いずれの教員も授業方法に工夫を凝らしており、熱心に授業に取り組んでいることの証左だろう。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

出席率や積極的参加などの評価項目の高さから、ほぼすべての教員が学生からの授業評価が概ね良好だったと認識していた。一方で、「この授業に関連して授業時以外に学習した時間」と「この授業をきっかけにして発展的な勉強をした」については、多くの教員が評価の低さを問題視していた。これらの問題に対して、CHORUSに授業関連資料をアップロードしたり、学生とディスカッション・対話する時間を設けたり、業界最新ニュースを渡したりするなどの工夫を取り入れる教員が多かった。これらの教員は前年度の評価との比較もしており、それによれば少しずつ改善もみられるようである。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

配付資料やパワーポイントなど授業の小道具、板書や声の大きさなど教員の性格・クセに対する学生の意見が多く書かれていた。その多くは好意的な意見であるが、中には要望

や注文がつけられていた。例えば、声が小さい、授業を配布プリントの単なる穴埋めにし
ないで欲しい、などである。教員の所見によると、そうした学生の要望や注文を拾い上げ
て、授業改善に繋げていこうとしている姿勢が伺えた。

また、観光地づくりや観光関連業界に関するゲストスピーカーの評価が高かった。観光学
学には実業と密接に結びついた講義が展開できるという利点があるので、今後もゲストス
ピーカー制度を積極的に活用すべきだろう。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

受講生数が多くなると、どうしても静肅性を保てず、教員から学生への一方通行になり
がちである。しかし、100名や200名を超えるような大人数の授業であっても、授業内で
グループによるディスカッションを取り入れたり、学生に発表させたりすることを通して、
「考える」機会を演出している授業もみられた。配付資料を作り込み、パワーポイントや
ビデオを活用する授業もある一方で、パワーポイント等の資料をまったく配付せずに学生
に板書をまとめさせるスタイルで学生の集中力の維持と理解の促進をねらう授業もあった。
そうした個性的な授業スタイルによる教員の意図を学生にうまく理解させ、学生に授業に
慣れてもらうという点が、授業を活性化させる一つのコツであるように思われる。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

静肅性が保たれている。配付資料やパワーポイントなどがよく準備されている。映像資
料がうまく活用されている。ゲストスピーカーの授業が楽しく効果的である。業界や実務
に即して実践的な授業内容である。ディスカッションが概ね高評価である。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

板書が読みにくい。滑舌がわるい。出席をとらない（ただし教員は学生の主体性を重視
して出席をとっておらず、代わりにディスカッションや発表を授業に取り入れている）。私
語が多い（ただし200人超の大人数クラスの意見）。

5. 今後の改善に向けて

観光学部の授業の課題は予習復習や発展学習の確保にある。アンケート結果から、少人
数クラスで、具体的事象に基づく授業内容にすると改善されることが分かった。教員も対
策として、CHORUSに授業関連資料をアップロードしたり、学生とディスカッション・対
話する時間を設けたり、業界最新ニュースを渡したりするなどの工夫を取り入れている。

大人数の授業であっても、授業内でグループによるディスカッションを取り入れたり、
学生に発表させたりすることを通して、「考える」機会を演出している授業もみられた。個
性的な授業スタイルによる教員の意図を学生にうまく理解させ、学生に授業に慣れてもら
うという点が、授業を活性化させる一つのコツであるようだ。

また、観光地づくりや観光関連業界に関するゲストスピーカーの評価が高かった。観光学
学には実業と密接に結びついた講義が展開できるという利点があるので、今後もゲストス
ピーカー制度を積極的に活用していきたい。

4-9 コミュニティ福祉学部

1. 科目選定方針とねらい

選定の基準は、次の通りである。(1) 後期科目で実施する、(2) 1 教員 1 科目以下の実施を原則とする、(3) 資格科目・新規科目を優先する、(4) 演習科目は対象外とする、(5) 昨年度実施科目を優先する。この結果、対象科目は延べ 42 科目となり、すべての科目でアンケートが実施された。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

- ・ 総合評価、特に「授業の満足度」(質問項目Ⅳ4) とその他の設問項目との関連は次のようなものであった。まず、「授業のわかりやすさ」(質問項目Ⅳ1) および「授業目標の明確さ」(質問項目Ⅳ2) は、「授業のねらいの明確さ」(質問項目Ⅱ3) と「授業内容の明確さ」(質問項目Ⅱ4) との関連が強かった。

次に、「授業の満足度」(質問項目Ⅳ4) は、「授業の進め方」(質問項目Ⅱ)、「授業から得たもの」(質問項目Ⅲ) のほぼ全ての質問項目と、比較的強く関連していた。一方で、「出席率」(質問項目Ⅰ1) や「履修にあたっての準備」(質問項目Ⅰ3)、それに「授業時以外の学習時間」(質問項目Ⅰ6)、「授業の静粛性」(質問項目Ⅱ5) との関連は低かった。

- ・ 授業への取り組み方についてみると、昨年も報告されていたが、授業時間以外の学習(質問項目Ⅰ6) の平均値は、2 時間に満たない学生が 9 割であった。また、授業をきっかけにして発展的な勉強をしたという回答も、3 割未満と比較的少なかった。これは学部の性質上、ボランティア活動や課外活動などに積極的に参加しているとも考えられるが、自主的学習を促す対策を講じる必要があるだろう。
- ・ 授業の進め方(質問項目Ⅱ) についての評価は、ほぼ全ての項目で比較的高かったが、板書の仕方についてのみ、やや低い評価であった。また、総合的な評価(質問項目Ⅳ) については、まだ改善の余地は残されているものの、全項目でやや高い傾向にあった。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業を欠席した場合、教員間でその扱いが異なる点について不満がある」という学生の意見に対して、「個々の欠席事由への対応については、判断に困るケースも多いため、学生は欠席の届出よりも、試験やレポート等の結果で学習の成果を示してほしい」との意見もあった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

- ・ 昨年度と同様に、授業環境(静粛であったか)、授業内容(教授法、評価法、難易度) についての学生の記述による評価に対する所見が多くみられた。前者については学生に自覚をもって授業に臨んでもらいたいという記述が、後者については学生の記述を今後の授業運営に活かしていきたいという記述がみられた。
- ・ また、とにかく要望があればアクションペーパーの利用や直接に述べてほしいとの記述がみられた。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

- ・ 受講生が 400 人を超えるような授業について、立教大学の FD としてどのような見解を持ち、今後どのような解決策を講じて行くのかについての見解を求めるとの指摘があった。
- ・ 受講生が 200 人を超えると授業の質を保つことが難しくなるが、さらに創意工夫を重ねたいとの記述があった。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

映像教材の使用に加えて、マイクの音量の調節や明瞭な話し方・速度など、学生に対してきめ細やかな配慮をしている講義、リアクションペーパーのコメントのフィードバックに努める講義、熱心に教える教員の姿勢に対して多くの肯定的評価がみられた。具体的には次のようなものであった。

- ・ 説明が分かりやすく、声も大きいため、よかった。勉強をする空気作りが上手な先生だった。映像を見ながら授業を聞いて理解がよくなった。
- ・ この授業は、すごく静かな中で行われていて良い。内容もわかりやすいし、考える能力が問われるのですごく勉強になる。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

授業中に私語が多いこと、資料の提示の仕方（板書の字が薄い、小さい、雑であるなど）など、授業環境について否定的な意見が見られた。昨年度指摘された教室の温度環境については指摘がなく、改善される傾向にあると考えられる。また、昨年度と同様に、授業規模が大きいほど否定的な具体的意見が多くみられた。具体例は次の通りである。

- ・ 人が多すぎて、私語が多いので、人数を半分にするなどしてほしい。
- ・ 受講生が多く、先生が注意しているのにとてもうるさかった。
- ・ カードリーダー使用で、ほぼ授業の終わりに来た人でも「出席」となるのは不公平。

5. 今後の改善に向けて

- ・ 授業時間外の自主的学習について：課題の提示や、より長い自主的学習を促している授業方法を共有する。
- ・ 履修者数の多い授業について：昨年度と同様に、抽選等により履修者数を制限する必要があるか否かを検討する。

4-10 現代心理学部

1. 科目選定方針とねらい

本学部では、以下の方針により授業評価アンケート実施対象科目を選定した。

- (1) 「学部共通選択科目（旧カリ「総合展開科目）」全科目
- (2) 初年次教育科目
- (3) 教職関連科目を除く講義科目すべて。このほか、共通シラバスにより展開される一部の演習科目

なお、教育効果に影響する外的要因（機器設備など）を検討し続けていくため、本学部が独自の設問を設けていることは、昨年度のアンケートと変わらない。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

今回の回答率は58.46%で、前年度よりわずかに下がっているが、データとしての信頼度は依然確保されていると考える。大学全体から見て中程度の回答率である。

学部全体の項目平均値を観ると、まず学生自身の自己評価は、教員に対する評価よりもやや低く、実際その学習時間は少なすぎるように思われる。教員と授業内容に対する評価は、映像視覚教材の使用に高い効果が認められている。逆に板書の仕方についての評価は高くない。設問ごとの値について、教員の「話し方」を聞きやすいとした学生は3.99、「ねらい」を明確と感じた学生は3.95、「授業内容」を明確と感じた学生は4.01と評価されており、いずれも悪くない数値であると判断している。このほか、「この授業から得るものができたこと」の設問では、「新しい考え方・発想」を挙げたものが3.96と最も多く、次に「基本的な専門知識」が得られたと感じる学生は3.89と堅調だった。これらに対して、「自分で調べ、考える能力」を挙げた学生は3.29と最も低い数値であった。このことは、大学教育が実を結ぶのに要する長い時間を考えれば必ずしも不思議ではないが、教育効果の観点からは、改善を目指すべきところかもしれない。総じて学生は、授業によって思考方法に自信を得た、というところまでには達していないようである。また、授業内容が持つ「現代に通じる普遍的な意味」は3.70であったが、これは学部学生にとって答えるのが困難な設問項目ではないだろうか。ただ、質問の意図は大切なものであるので、尋ね方を変えてみることも考えられていい。総合的には、授業への学生の満足度は低くないと感じている。また、環境や設備についての満足度は、この種のデータとして大変高いと言っているだろう。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

担当教員の所見は、要約すれば「①学生の学問的意欲を一層引き上げること」、「②学生の授業理解を一層深めていくこと」及び「③学生がより積極的に授業参加できる環境を作っていくこと」などを今後の課題とする点でほぼ一致している。教員側のFDに対する意識が年々高まっているように思われる。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

本学部においては「記述による評価」の文言を不快とする教員はおらず、それぞれの受け止め方をして、授業改善につなげようとしているようである。通常の授業においてもり

アクション・ペーパー等を活用する教員は多く、学生との一定の意思疎通は普段から成り立っているものと思われる。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

この項目についての本学部教員の回答は、それぞれに具体的かつ多様であり、まとめ難いが、学生が自主的に学びうる状況をどのようにして作り出すか、そのために授業の魅力や説得性をどの方向に高めていけばいいのか、といったことを念頭に置いている点では、ほぼ共通している。具体的には、授業における各種機材の活用や、話し方のスキルアップを挙げる教員もいる。全体として真摯な内容であった。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

小規模クラスの授業が評価されている点では、例年どおりだった。比較的多人数の講義形式の授業であっても、内容によっては肯定的評価を得ている。何をねらいとし、何を伝えようとしているかを常に明らかにしている授業に対して、やはり学生の評価は高い。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

授業中の私語がなくなること、教員の発音が聞き取りにくい場合があること、板書が読みにくい場合あるいは丁寧さに欠ける場合があること等については否定的意見がある。これらの点は、例年どおりの意見であった。

5. 今後の改善に向けて

アンケート全体を通して感じられることは、教員側の授業力向上への工夫は、ここ5,6年のあいだに非常に強まってきている。すなわち、分かりやすく、参加しやすく、魅力ある授業を展開しようとする意識の高まりが、はっきりと感じられる。この点では、アンケート実施の効果は大きく評価してよいと思われる。にもかかわらず、学生が自立した学習意欲を持ち、将来を目指した勉学に自ら取り組むようになったかと言えば、はなはだ心もとない。授業時での束の間の満足に終わっている事柄を、過大に評価すべきではない。問題は、授業力向上への工夫が、教員側だけで空回りをせず、学生の現状と正しく対応しているかどうかを、その年、その年において柔軟に、適確に見ていくことだろう。こうしたことをアンケートの抽象的な数字から読み取ることは、現場の教員としてはなかなか容易ではない。学生は絶えず変化し、社会環境も変動を続けている。そのなかで、大学教育が主張していくべき基軸が何であり、眼前の学生に我々は何を求めようとしているのか、教員、学科、学部、大学全体の諸レベルを通じて、いつも明瞭に捉え直されていなくてはならない。そうしたことが不断に行なわれていなければ、アンケートの毎年の実施は、顧客意識の市場調査に似たものとなって、一方で目まぐるしい要求を生み、他方では惰性化して、学問的、教育的意味を失くしていくだろう。改めて、自戒しておきたいところである。

4-1-1 全学共通カリキュラム

1. 科目選定方針とねらい

2011年度は、全カリ総合Aの講義系科目を対象とし、後期開講科目を担当する1教員(専任・兼任)につき1科目とし、合計129科目で実施された。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

履修者総数 21,937 名から 11,558 通(回答率 52.69%)の回答があった。この回答率は、全ての対象学部の総平均 58.98%と比べると 6%余り低く、社会学部に次いで低い数値である。出席率の低さがうかがえる。

1) 設置科目別平均値の全体的傾向

教員側の準備に対する評価は、決して低くない。設問項目のうち、II「この授業の進め方は…」における回答は、板書(II7)を除いては、すべて 3.8 を超える。総合的な授業に対する評価も、わかりやすさ(IV1)、授業全体の目標の明確さ(IV2)はいずれも 3.9 点台だし、学問的興味をかきたてられた(IV3)も 3.78、満足度(IV4)も 3.85 である。

それに対し、学生側の取り組みを見ると、履修にあたって十分な準備ができていた(I3)のは 3.03 であり、授業をきっかけにして発展的な勉強をした(I4)に至っては 2.90 である。学生が謙虚にも自らに厳しい評価を与えているようにも見える。しかし、授業時以外に学習した時間が、0 時間と答えるのが 45%、1 時間未満が 33%であり、1 時間以上勉強したのが出席者の 5 人に 1 人程度では、やはり寂しい。

また、III「この授業から得るものができたこと」でも、「自分にとって新しい考え方・発想」(III1)が 3.87、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」(III2)が 3.75、「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」(III4)が 3.65 と、3 点台の後半であるのに対し、「自分で調べ、考える姿勢」(III3)が 3.19 とガタンと落ちる。今日、どんなに先端的な知識でも既存の知識は急速に陳腐化し、普遍的価値は次々に揺らいでゆく。講義系科目の限界とあきらめずに、「自ら調べ、考える」ことの重要性を学生に伝えてゆく必要があるように思われる。

最後に、「シラバスは受講に役立った」(I5)の平均点は 3.49 である。学生にとって全カリ科目の選択にはシラバスが重要であると思われるのにもかかわらず、約半数の学生が、3(どちらともいえない)以下の回答をしていることは、注意すべきである。

2) 「授業規模別平均値」の特徴

授業規模により解答に大きな変化があるのは、「十分な静粛性が保たれた」(II5)に対する回答で、50 名以下が 4.44、51~100 名が 4.02 とそれぞれ 4 点台なのに対し、101~150 名が 3.92、151 名以上が 3.51 と、3 点台に落ちる。受講者数が多いと、必然的に全体の静粛性を保つのが難しくなる。

ただし、受講者数が多いことは、学生の関心が高い内容の授業をしていることの表れでもある。151 名以上の科目は、授業全体を通じての出席率(I1)が 150 名以下の科目のいずれよりも高く、授業から「自分にとって新しい考え方・発想」(III1)や、「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」(III4)を得られたとしたポイントも、

同様に 150 名以下の科目よりも高くなっている。「積極的参加」(I2) も 50 名以下と並んで最も高い。その結果、Ⅲ「この授業から得るものができたこと」、Ⅳ「総合的にみて…」の各項目は、150 名以上の科目は、ほぼすべてにおいて平均を上回るポイントを得ている。

3) 「学年別平均値」の特徴

学年別の回答者数でみると、全カリでは例年通り 1 年生が多く、全カリ全体の回答の 44.4% を 1 年生が占めていた (4 年生は 10.5%)。当然、1 年生の意識が調査結果に大きく反映してくると思われる。

全カリでの学年別の傾向について分析すると、まず I1「出席率」は学年が進むにつれて低下し、1 年から 4 年になると 0.3 ポイント減少する。一方、I3, I4, I5, I6 の 4 項目は、1、2 年に比べ 3、4 年の方が高評価を得ており、学生側の受講姿勢がより能動的になっていることが分かる。

Ⅱ「授業の進め方」、Ⅲ「授業で得たもの」、Ⅳ「総合評価」は、そのほとんどで学年が進むにつれて高くなる傾向が見られた。逆に言えばこれらの項目が下位の学年、特に 1 年生で低い傾向が見られたということになる。その一因として、中学・高校での授業形態からなかなか脱却できず、その結果、大学の講義の形態へ短期間で十分に順応しにくい現況を反映していることが、考えられる。

4) 相関係数表について

項目同士の相関をあらわすデータが提供されているが、例えば I「この授業への取り組み方」のうち、「授業に積極的に参加した」(I2) との回答は、Ⅲ「授業から得たもの」、Ⅳ「総合評価」のほぼすべての項目に比較的強い相関を示している。また、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(I4) の回答は、Ⅲのすべての項目に比較的強い相関を示しており、Ⅳ「総合評価」の中でも、「学問的興味をかきたてられた」(IV3)、「この授業を受けて満足した」(IV4) との相関も比較的強い (授業の分かりやすさ (IV1)、授業全体の目標の明確さ (IV2) との相関はそれほど強くない)。授業に積極的に参加し、自ら発展的に勉強すれば授業から多くのものを得ることができ、授業への満足も高まるのは、ある意味当然ではある。相関係数は因果関係を示すものではない以上、分析にはどうしても主観が入り込むが、こうした結果からは、学生の積極性を高め、より良い授業へ取り込んでゆくことの重要性が指摘できよう。

もちろん、Ⅱ「授業の進め方」の各項目も、概してⅢ「授業から得たもの」とⅣ「総合評価」との相関が高いことも事実であり、こうした教員側の努力の重要性も学生の取り組みに劣らず重要である。

他方で、「十分な静粛性」(Ⅱ5) と全カリ独自の設問である「教室の大きさ」(V1)、「受講者数」(V2)、「教室の環境や設備」(V3) は、Ⅲ「授業から得たもの」、Ⅳ「総合評価」のどの項目ともさほど強い相関を示していない。I「授業への取り組み方」やⅡ「授業の進め方」が、Ⅲ「授業から得たもの」、Ⅳ「総合評価」と大まかに強い相関をもっていることは、関係する教員や職員の努力もあって、学生が授業に集中できる健全な教育環境が実現していることを意味していると評価することもできよう。

3. 今後の改善に向けて

全カリでは、2012年度から、すべての科目を抽選登録科目としてスタートさせる制度改革を行った。その成果として、2012年前期の履修登録結果は、2011年度に比べて大規模クラスの規模が大きく縮小した。授業環境の改善が、学生にとっても教員にとっても良い影響をもたらすことが期待される。

他方で、今後の改善点としては、「2.集計データにみられる結果のまとめ」でも触れた点ではあるが、学生の積極的な参加や自主的な勉強を促すといった、学生の主体的な取り組みを促す試みが挙げられよう。全カリでは2012年度からカリキュラム改革が実施に移されるが、講義系科目においても、「自ら調べ、考える」ことの重要性を学生に伝えてゆく必要があるように思われる。

4. 総合Aの各カテゴリーの総評

4-1 「人間の探究」

このカテゴリーの各項目平均値は、全カリの他のカテゴリーと比較するとわずかに低い項目が散見されるが、ほぼ全カリの平均値である。平均値より低い項目で、敢えて見逃すべきではないところを挙げるとすれば、II6（教科書・レジュメ等の効果）、II7（板書）、II8（映像視覚教材の効果）であろうか。いずれも、基本的な授業方法と技術に関わる項目であり、重要であるが、個々の教員たちが年々改善努力を重ねているところである。板書については、視聴覚教材の効果との兼ね合いで考慮すべきであるし、また、大教室における問題を指摘する所見も多く、一律の評価に適さない面もあるだろう。

全体として、履修者数が増すにしたがい静粛性維持（II5）に困難を極めるのは明らかなのに、授業規模（履修者数）により満足度（IV4）に大きな差がないのは興味深い。大規模教室担当教員の努力の証左とも推測される。また、昨年度にも指摘されていたことであるが、学年を重ねるにつれ（回答数は減少するものの）肯定的な評価が増していることも興味深く、多くの教員が判で押したように「反省」するI4（発展的学習）やI6（自主学习）、そして満足度が有意な差を示しているのは、初年次教育の課題を示唆している。

今年度は後期科目についてのみの実施であったため、当然、例年より所見を寄せた科目数も少なかった。また、履修者数と回答数に極端な落差がある科目も散見される（履修者数364に対し、回答者数58など）。それでも、担当教員と熱心な学生たちのためにも、所見の記述には、大学全体として誠実に応えていく必要があることを、あらためて銘記しておきたい。

4-2 「社会への視点」

「社会への視点」について、一部の項目を除き、全学平均よりも数値が高いものが多いのは、全カリ総合科目の履修者が自ら希望する科目を取り、準備を行い、意欲的に授業に参加していること、また教員もその希望に応えていることを示しているといえる。

とりわけIII2「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」のポイントやIII3「自分で調べ、考える姿勢」が他のカテゴリーに比べて高いことから、学生が自ら積極的に授業に参加し、調べ考える力を高めていると実感していることが理解される。

その一方、全学平均よりも低かったのが、Vの1～3の「教室の大きさが適切だった」「受

講者数が適切だった」「教室の環境や設備が十分だった」という項目で、前年度から引き続き、全カリの社会科学分野に固有のこうした問題が解決されていないことを示している。

所見票については、受講者数が非常に多く、とりわけ 2011 年度は節電がいわれ教室環境もあまり良くない中で、各教員が苦闘している様子が見て取れる。全学部・全学年を対象としているために、なかなかターゲットを絞ることができないというジレンマを抱えながらも、各教員は映像の利用やゲストスピーカー、リアクションペーパーなどにより学生を惹きつけるための様々な工夫をしている実態が浮かび上がった。人数の多さに対応するためにも、今後は、CHORUS などの自学自習支援システムをさらに活用するなどして、有効な情報の提供や教材の配布などを行っていきけるような工夫がなされることが不可欠だといえる。

4-3 「芸術・文化への招待」

このカテゴリーは、全体として全カリの平均値を下げている。静肅性（Ⅱ5）や視聴覚教材の効果（Ⅱ8）が高い評価にあるのは、このカテゴリーの特性を示すものだろう。

一方で、Ⅱの 1~4 にならぶ、話し方、量、ねらいや内容の明確さは総じて低評価であることは見逃せない。これは、当然、Ⅳ（総合評価）の低評価と相関する。また、Ⅲの授業から得たもの、具体的には新しい発想や基本的な専門知識、内容のもつ普遍的な意味なども低評価が目立ち、総合的満足度（Ⅳ4）は 3.68 である。この数値自体をどう評価するかは見解が分かれるであろうが、年々低下傾向にあったところ、昨年度は改善されたが（3.86）、また逆戻りしていることが懸念される。厳しく見れば、受講学生たちの期待とのずれが示唆されていると言えるのだろう。

実施科目 21 のうち、所見が寄せられたのは 14 科目で、所見を寄せない担当者が多数いた。受講学生が両極化しているとの声をしばしば耳にするが、まさか担当者も両極化しているわけではないだろう。毎年のルーティン化を憂いているものと推測される。

あるベテラン教員は、長文の所見を寄せ、自らの弱点を真摯に反省し改善策を述べながらも、個人力ではいかんともしがたいこととして、設備面の問題点（見え辛い書画装置、空調、ミシミシ音をたてる床等々）を訴えている。

こうした数少ない声に誠実に応えていくことがなければ、所見はさらに減り、評価活動の意義は減じていく一方だろう。

4-4 「心身への着目」

全カリ総合科目「心身への着目」の科目群は、心理学、スポーツ科学、ウエルネス科学、福祉学の各分野から構成されている。アンケート回答者数と科目数から算出した平均クラスサイズは、5つの総合科目群中最も多く、大人数科目が比較的多い傾向にあるのが特徴である。このことが、静肅性に関する低い評価の一因であることが示唆されるが、教室の大きさや受講者数に関する評価は高かった。昨年度との比較では、平均クラスサイズは 20%ほど少なくなっており（148名→120名）、改善傾向にあることが示唆された。次年度からは、履修登録方法の変更によりさらなる改善が期待できる。

授業内容に関する評価では、Ⅱ「授業の進め方」に関する項目では 9 項目中 8 項目、Ⅳ「総合的評価」ではすべての項目で最高値を示し、担当する教員の講義形式、内容が高く

評価されていた。一方で、Ⅰ「授業への取り組み」に関する項目では、自学自習時間が最も少なく、発展的な学習ができていない傾向が見られた。さらに、Ⅲ「授業から得たもの」に関する項目でも、新しい考え方・発想を得ることができたが、自分で調べ、考える姿勢を得ることは十分にできていないことが示唆された。

これらの結果から、大人数科目が多い中、各教員が工夫して授業を展開していることが示唆された。今後は、CHORUSなどの自学自習支援システムを利用しながら、自分で調べ、考える姿勢を習得できるような、さらなる工夫が必要であると考えられる。

4-5 「自然の理解」

カテゴリ別の科目数・回答者数をみると、カテゴリ5「自然の理解」では科目あたりの回答者数が最も少ないことがわかる。アンケート結果そのものは、他のカテゴリに対するものと取り立てて差はない。強いてあげるとすれば、Ⅲ2「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」の獲得に関するポイントは高めであり、理系科目の必要性が浮かび上がるが、一方でV2「この授業の受講者数は適切だった」のポイントが高いのは、受講者が比較的少ない授業が多いことからであろう。

これと関連して、Ⅱ1「聞きやすい話し方だった」とⅡ2「各回の授業内容の量が適切だった」のポイントが低めであり、理系の内容が多く、学生にとって異文化であり、理解しにくいものである事が見受けられる。また、Ⅱ8「映像視覚教材の使用が効果的だった」とⅡ9「教員はこの授業の準備を周到に行っていた」のポイントが相対的に低いことが注目される。

学生にとってためになる授業であるにも関わらず、受講者数が少ないという現状がある。科目内容を効果的に伝える工夫によって、状況が改善される事が望まれる。

4-12 学校・社会教育講座

1. 科目選定方針とねらい

教職課程は「講義科目 1 教員 1 科目」を原則として実施し、他課程は、課程主任の判断で、重点的科目に限って実施した。各教員の授業の改善や工夫について検討するために有用なデータを得たいと考えたためである。

2. 集計データにみられる結果

調査対象科目の履修者数が 3,775 人と多くないとはいえ、回答率が 81.43% (3,074 人) と極めて高くなった。これは授業の出席率の高さ (授業全体を通じての出席率の平均値は 4.76) の反映かと思われる。

まず、設問項目別平均値について述べる。既述のとおり、学校・社会教育講座 (以下講座) では、出席率が高いことが際立っており、出席への意欲と実行を見て取ることができる (平均値 4.76、標準偏差 0.51)。続いて、「教員は授業の準備を周到に行っていた」が高い評価を得ている (平均値 4.35、標準偏差 0.81)。授業の進め方についての設問 II の 9 問に対する回答は平均値が軒並み 4.00 を超えている。唯一 4.00 を下回ったのは、「板書のしかたが適切だった」である (平均値 3.72、標準偏差 1.02)。一方で、学生自身の取り組み方について聞いた設問 I の 6 問については、4.00 を超えたものの方が少なく、上述の出席率のほかは、「この授業に積極的に参加した」のみであった。授業から得たものを聞いた設問 III の 4 問や総合的評価を聞いた設問 IV の 4 問は、概して 4.00 近い評価であるものの、設問 III の「自分で調べ、考える姿勢」は平均 3.51 (標準偏差 1.01) と比較的低い値にとどまった。これと設問 I の「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」への回答が平均値 3.19 (標準偏差 1.06) であることを合わせてみると、学生には、自立した発展学習へ展開したとの認識は高くないようにみえる。

設問項目別平均値を、講座内 4 課程中、2 科目以上で調査を行った教職課程と司書課程の課程別に算出した結果からは、概して、教職課程科目の評価が高いことがわかる。特に、授業の進め方について聞いた設問 II に対する回答は、すべて高得点と言ってよいだろう。同じ設問群についての司書課程の結果も悪くないが、「十分な静粛が保たれた」の結果が特に高かった (平均 4.51 ; 対して講座平均は 4.19)。授業が静粛であることは評価すべき点だが、一方で、講義科目とはいえ授業中のコミュニケーションの不足を示していないか、省察の材料となろう。

授業規模別平均値では、101~150 名規模の、講座では比較的大規模クラスと言える科目での評価が概して低くなっており、クラス規模は 100 名以下に抑えることが、教育の質の向上に有効であることを示唆していると思われる。

学年別平均値では、概して、学年が上がるにつれて、評価がわずかではあるが高くなっている。学生が大学の授業に慣れてゆくということもこの背景にはあろう。

設問への回答の相関関係の分析では、授業のわかりやすさ (設問 IV1) と授業目標の明確さ (設問 IV2) が、聞きやすい話し方 (設問 II1)、授業のねらいの明確さ (設問 II3)、授業内容の明確さ (設問 II4) と相互に関係し合っていることが目立った。聞きやすく話し、ねらいや内容を明確に示すことが、授業の理解を促すと考えてよいだろう。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「熱心」「前向き」といった学生の態度への好感を、兼任講師を含めて、多くの教員が述べている。ただし、同時に、授業時以外での学習時間については、もう少し多くしたいという希望を記したものが散見された。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業の運営や教授法について、例えば配付資料、グループワーク、板書、課題のあり方を試行錯誤している様子がこの所見欄の記述からわかる。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

板書と視聴覚教材やPC等の活用を検討したい旨、授業外での学習に対して学生が積極的に取り組むような工夫をしたい旨、複数の教員が述べていた。後者については、推薦図書のみでは不十分であるため、予習・復習の指示、グループワーク等の何らかの演習的な課題を検討するという意見も見られた。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

学生に訴えかける教員の熱意への言及が少なからず見られたが、専門職を養成する資格付与課程の特徴と思われる。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

グループワークでの難しさの指摘が散見される。教員側が講義科目で主体的な学習を促すための工夫をしても、履修者が多い場合には目を行き届かせることは難しく、そのことが否定的な評価に影響しているのではないかと思われる。

5. 今後の改善に向けて

学生からの意見に対する教員の所見の記述は、真摯である。記述欄を用いて建設的な意見が提示されれば教員側は検討する姿勢をもっているから、今後も記述欄に、建設的な提案を理由とともに提示してもらえれば、授業の改善に向けて有益であろう。

講座の履修は各課程への事前登録が必要なこともあり、まじめで学習意欲のある学生が集まる。授業の進め方の工夫・改善はすでに行われてきており、満足度は概して高いが、授業が学問的興味をかきたて、学生の発展的な学習を促すには未だ至っていないようである。教員間でこうした評価結果の共有を進め、改善案を話し合う等の工夫もしていきたい。

5. 2011 年度のまとめと今後の展望

2011 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会
委員長 東條 吉純

2011 年度前期は、東日本大震災の影響により、授業開始日が 5 月 6 日となり前期授業期間が短縮されたが、不足する時間数は教室外学習によって補うとの措置がとられたため、前期末の授業評価アンケートも予定通り実施された。

2011 年度は、2009 年度の教育改革推進会議において決定された「基本方針」（中期的な実施計画）にしたがい、「学部等の必要性に応じた選定」により実施された。まずはじめに、本学における教育インフラの重要な一部をなす授業評価アンケートが、2011 年度も安定的に実施されたことを報告したい。前期の実施科目数は、例年より少ないが、これは東日本大震災の影響によるものである。各学部等の科目選定方針を見ると、新カリキュラムの有効性を検証するための実施（例：理学部数学科）、すべての講義科目について原則実施（例：社会学部、経営学部など）、共通シラバスによる複数コマ開講科目について実施（例：経済学部）、1 教員 1 科目の原則による実施（例：観光学部、全カリ、講座など）など、文字通り、各学部等の必要性に応じて、さまざまな選定方針が策定され、アンケート調査が実施されたことが分かる。このような授業評価アンケートの活用は、まさに 2009 年に合意された「基本方針」の期待通りの展開であり、今後も個々の教員 FD のみならず、各教育部局による組織 FD の取り組みの進展が期待される。

また、2011 年度より、回答選択肢への「該当しない」項目を追加し、アンケート回答にかかる教員・学生双方が抱く違和感（例：映像視覚教材を用いない授業科目で、映像視覚教材の有効性について問う）を解消する上で、小さな修正ではあるが、アンケート調査に対する信頼感を維持する上で意外に重要と思われる改善も行われた。

授業評価アンケート集計結果の活用については、各学部等によって統計学的な評価・分析能力に違いがあることは否めないところ、本委員会としては、大学教育開発・支援センターや社会情報教育研究センター（CSI）とも連携を図りつつ、学部等の教育力向上ないし組織 FD の取り組みのために、各学部固有のニーズに応じて、より積極的なサポートを行っていきたいと考えている。

また、2012 年度実施に向けて、従来から指摘のあったアンケート実施時期について、より有効なアンケート実施が可能となるよう変更した。すなわち、これまで試験の安定的かつ確実な実施を確保し、運営上の混乱を避けるため、最終授業時試験の実施週（最終授業週）を避けてアンケート実施期間を設定してきたが、この点を再考し、2012 年度より、アンケート実施は最終授業週を含む最後の 2 週間に実施するものとした（注：ただし、第 1 週目の実施が原則）。この改善によって、可能な限り、実施科目の授業日程を終えた後にアンケート実施できるようになった。

授業評価アンケート制度は、大学基準協会による認証評価項目の一つにも挙げられており、大学における FD の取り組みの成果を測定するための数少ないツールの一つである。学生によるアンケート調査である以上、その有効性には様々な問題点もあるのは無論のことであるが、これに代わる適切かつ有効な測定方法が開発・実施されない限り、授業評価ア

ンケート制度が、今後も、本学の教育インフラの一部であり続ける。

本学における授業評価アンケート制度は、一方で教員組織サイドには、個々の教員における授業力の向上、学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定、大学としての教育力向上等を目的とし、他方で学生サイドには授業履修への積極性と責任意識を喚起するというそれ自体教育的な狙いをもってスタートした。2004年度の開始以来、9年目を迎えた今、このような本制度の本旨に立ち戻り、大学教育を創る主体である教員と学生の協同作業という観点から、両主体による本制度へのさらなる「コミットメント」に期待したい。

6. 集計データ（資料編）

6-1 回答者数・回答率

延べ回答者数 58,278名

表1 学部等別履修者数と回答者数、および回答率

科目開設学部等	履修者数	回答者数	回答率
文	6,578	4,375	66.51
経済	3,614	2,404	66.52
理	6,602	4,093	62.00
社会	10,383	5,130	49.41
法	2,564	1,376	53.67
経営	16,621	9,945	59.83
異文化コミュニケーション	399	361	90.48
観光	10,562	6,855	64.90
コミュニティ福祉	5,271	2,969	56.33
現代心理	10,500	6,138	58.46
全学共通カリキュラム	21,937	11,558	52.69
学校・社会教育講座	3,775	3,074	81.43
合計	98,806	58,278	58.98

注1) 履修者数・回答者数は、アンケート実施科目の延べ履修者、回答者

注2) 学部等は、アンケート実施科目の開設学部により分類した

表2 学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	1年	2年	3年	4年	不明	合計
文	1,787	1,228	834	437	89	4,375
経済	1,972	245	85	48	54	2,404
理	1,406	1,436	872	289	90	4,093
社会	1,993	1,638	998	422	79	5,130
法	693	231	264	162	26	1,376
経営	4,054	2,986	1,681	857	367	9,945
異文化コミュニケーション	230	116	1	0	14	361
観光	1,377	2,615	1,993	746	124	6,855
コミュニティ福祉	793	974	882	267	53	2,969
現代心理	1,587	2,011	1,790	620	130	6,138
全学共通カリキュラム	5,021	3,322	1,772	1,189	254	11,558
学校・社会教育講座	1,142	1,130	604	110	88	3,074
合計	22,055	17,932	11,776	5,147	1,368	58,278

注1) 回答者数は延べ人数

注2) 学年は当該学部等で実施したアンケートに回答した学生の学年を示す

注3) 学部等により実施科目の選定方針が異なるため、学年の偏りがある

6-2 学部等別平均値

表3 文学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	4,367	4.65	0.59
I 2 この授業に積極的に参加した	4,364	3.90	0.96
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,361	3.31	1.06
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,352	3.20	1.14
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	4,323	3.53	1.07
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	4,355	2.36	1.21
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,360	4.01	1.05
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,360	3.98	0.96
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,356	3.94	1.02
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,350	3.98	1.01
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,345	3.94	1.14
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,301	3.84	1.05
II 7 板書のしかたが適切だった	2,766	3.44	1.11
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	3,007	4.02	1.06
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,232	4.21	0.88
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,353	3.91	1.00
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,351	3.87	0.96
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,350	3.52	1.11
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,344	3.66	1.06
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,350	3.91	1.07
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,350	3.93	1.02
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,350	3.85	1.08
IV 4 この授業を受けて満足した	4,350	3.89	1.09
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	4,244	4.24	0.98
V 2 この授業の受講者数は適切だった	4,243	4.12	1.01

注1) 回答者数は延べ人数(II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている)

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表4 経済学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	2,403	4.66	0.63
I 2 この授業に積極的に参加した	2,402	4.07	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,397	3.41	1.06
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,394	3.31	1.10
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	2,384	3.13	1.11
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	2,393	2.54	1.08
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,401	4.00	1.06
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,399	3.87	1.05
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,399	3.89	1.03
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,394	3.92	1.04
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,401	3.76	1.13
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,380	3.83	1.05
II 7 板書のしかたが適切だった	1,704	3.54	1.16
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	1,440	3.82	1.12
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,334	4.14	0.93
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,398	3.64	1.02
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,400	3.87	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,399	3.53	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,393	3.55	0.99
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,401	3.87	1.10
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,399	3.89	1.01
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,400	3.63	1.08
IV 4 この授業を受けて満足した	2,400	3.78	1.08
V 学部等による設問			
V 1 (全科目共通設問) 教室の規模と設備は適切であった	2,155	4.18	0.90
V 2 (基礎ゼミナール2) 英語で経済文献を読む力が増した	572	3.62	1.00
V 3 (基礎ゼミナール2) レジュメやレポート作成の際に英語文献にまで視野が広がった	571	3.21	1.15
V 4 (情報処理系科目)「情報処理入門」(1年次前期科目)は当科目の学習に役立っている	703	4.05	0.93
V 5 (情報処理系科目)表計算ソフト(Excel)の応用力が身についた	706	4.04	0.87
V 6 (情報処理系科目)Power Pointでプレゼンテーション資料を作成する力が身についた	699	3.70	1.03
V 7 (情報処理系科目)WEB上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた	706	3.84	0.92

注1) 回答者数は延べ人数(II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている)

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表5 理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	4,086	4.73	0.64
I 2 この授業に積極的に参加した	4,083	3.94	1.00
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,075	3.23	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,075	3.17	1.10
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	4,057	3.15	1.11
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	4,069	2.54	1.08
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,082	3.70	1.17
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,084	3.63	1.12
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,077	3.72	1.07
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,076	3.74	1.08
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,068	3.96	1.05
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,055	3.58	1.15
II 7 板書のしかたが適切だった	3,473	3.51	1.18
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	2,648	3.64	1.16
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	3,990	4.00	0.98
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,078	3.59	1.04
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,076	3.74	1.00
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,077	3.45	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,072	3.35	1.07
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,077	3.57	1.19
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,076	3.69	1.08
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,077	3.52	1.11
IV 4 この授業を受けて満足した	4,077	3.57	1.15
V 学部等による設問			
V 1 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	3,856	3.84	1.00
V 2 (1年次前期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違い を考慮して授業展開をしてくれた	666	3.40	1.16
V 3 (必修科目のみ) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同 士が共同して解決策をとった	2,132	3.68	1.13

注1) 回答者数は延べ人数(II 7, II 8では「該当しない」と回答したものは除いている)

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表6 社会学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	5,124	4.56	0.70
I 2 この授業に積極的に参加した	5,123	3.74	0.99
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	5,117	3.07	1.02
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	5,110	2.94	1.10
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	5,092	3.44	1.02
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	5,111	2.04	1.03
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	5,116	3.87	1.05
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	5,115	3.91	0.95
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	5,113	3.84	0.98
II 4 各回の授業内容は明確だった	5,103	3.87	0.98
II 5 十分な静粛性が保たれた	5,105	3.78	1.14
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	5,061	3.71	1.05
II 7 板書のしかたが適切だった	3,521	3.37	1.08
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	4,029	3.96	1.03
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,978	4.10	0.89
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	5,106	3.72	0.97
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	5,104	3.73	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	5,101	3.22	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	5,091	3.67	0.98
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	5,103	3.81	1.05
IV 2 授業全体の目標が明確だった	5,102	3.81	0.98
IV 3 学問的興味をかきたてられた	5,101	3.65	1.07
IV 4 この授業を受けて満足した	5,101	3.75	1.04

注1) 回答者数は延べ人数(II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている)

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表7 法学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	1,374	4.62	0.79
I 2 この授業に積極的に参加した	1,371	3.90	1.03
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	1,371	2.98	1.02
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	1,370	2.86	1.06
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	1,364	3.19	1.09
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	1,370	2.27	1.00
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	1,373	3.89	1.09
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	1,374	3.84	1.04
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	1,373	3.85	1.02
II 4 各回の授業内容は明確だった	1,371	3.92	1.01
II 5 十分な静粛性が保たれた	1,367	3.87	1.04
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	1,361	3.60	1.15
II 7 板書のしかたが適切だった	985	3.12	1.21
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	805	4.01	1.18
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	1,341	4.18	0.90
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	1,373	3.58	1.01
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	1,372	3.83	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	1,370	3.24	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	1,372	3.65	0.95
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	1,373	3.82	1.12
IV 2 授業全体の目標が明確だった	1,373	3.85	1.01
IV 3 学問的興味をかきたてられた	1,372	3.59	1.12
IV 4 この授業を受けて満足した	1,373	3.69	1.11

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表8 経営学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	9,923	4.71	0.59
I 2 この授業に積極的に参加した	9,920	4.03	0.96
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	9,919	3.49	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	9,908	3.42	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	9,872	3.41	1.06
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	9,903	2.61	1.22
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	9,912	3.98	1.05
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	9,913	3.92	1.00
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	9,910	3.99	0.97
II 4 各回の授業内容は明確だった	9,900	4.00	0.97
II 5 十分な静粛性が保たれた	9,881	3.85	1.11
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9,817	3.87	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	5,221	3.65	1.10
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	8,819	4.07	0.98
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	9,701	4.21	0.89
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	9,904	3.91	0.97
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	9,897	3.97	0.91
III 3 自分で調べ、考える姿勢	9,899	3.66	1.05
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	9,883	3.83	0.97
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	9,894	3.93	1.05
IV 2 授業全体の目標が明確だった	9,893	3.98	0.98
IV 3 学問的興味をかきたてられた	9,891	3.83	1.07
IV 4 この授業を受けて満足した	9,892	3.91	1.06

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表9 異文化コミュニケーション学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	361	4.80	0.46
I 2 この授業に積極的に参加した	361	4.30	0.79
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	361	3.78	0.91
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	360	3.47	1.02
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	356	2.92	1.06
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	360	3.04	0.88
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	361	4.27	0.83
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	361	3.95	1.00
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	360	3.83	0.95
II 4 各回の授業内容は明確だった	360	4.01	0.87
II 5 十分な静粛性が保たれた	361	3.93	0.91
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	354	3.87	0.86
II 7 板書のしかたが適切だった	195	3.73	0.90
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	120	3.71	1.06
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	342	4.25	0.81
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	361	4.25	0.86
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	361	3.83	0.95
III 3 自分で調べ、考える姿勢	361	4.06	0.88
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	360	3.86	0.91
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	361	4.02	0.91
IV 2 授業全体の目標が明確だった	361	3.95	1.01
IV 3 学問的興味をかきたてられた	360	3.75	1.04
IV 4 この授業を受けて満足した	361	3.84	1.03

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表10 観光学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	6,845	4.61	0.66
I 2 この授業に積極的に参加した	6,840	3.95	0.94
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,833	3.20	0.99
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,829	3.03	1.08
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	6,796	3.50	1.02
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	6,828	2.07	0.99
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,840	3.92	1.07
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,838	3.91	1.02
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,834	3.91	1.00
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,826	3.94	1.00
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,830	3.91	1.07
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,764	3.84	1.08
II 7 板書のしかたが適切だった	3,681	3.51	1.13
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	6,043	4.01	1.05
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,704	4.26	0.85
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,829	3.80	0.97
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,832	3.81	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,825	3.35	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,821	3.61	1.01
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,836	3.88	1.07
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,832	3.88	1.01
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,831	3.72	1.08
IV 4 この授業を受けて満足した	6,833	3.81	1.07
V 学部等による設問			
V 1 わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ(観光学部以外の学生は答えないこと)	6,238	2.95	0.98
V 2 わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う	6,569	3.89	0.99
V 3 わたしは、新座キャンパスで学ぶことに満足している	6,567	4.08	1.01
V 4 わたしは、旅行することが好きだ	6,561	4.50	0.81
V 5 わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した	6,544	3.52	1.10
V 6 わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた	6,546	3.31	1.18
V 7 わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた	6,544	3.49	1.16

注1) 回答者数は延べ人数(II 7, II 8では「該当しない」と回答したものは除いている)

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表 1 1 コミュニティ福祉学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	2,961	4.54	0.66
I 2 この授業に積極的に参加した	2,962	3.84	0.95
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,959	3.07	1.06
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,955	2.91	1.09
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	2,942	3.45	1.04
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	2,953	2.03	1.01
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,962	3.95	1.00
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,959	3.97	0.96
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,957	3.95	0.97
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,955	3.95	0.96
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,958	3.90	1.11
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,931	3.81	1.06
II 7 板書のしかたが適切だった	2,055	3.38	1.11
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	2,473	4.03	1.03
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,896	4.18	0.88
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,958	3.79	0.98
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,957	3.73	0.96
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,958	3.24	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,953	3.66	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,959	3.83	1.04
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,958	3.88	0.98
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,956	3.66	1.07
IV 4 この授業を受けて満足した	2,955	3.77	1.04

注 1) 回答者数は延べ人数(II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている)

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表 1 2 現代心理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	6,123	4.57	0.68
I 2 この授業に積極的に参加した	6,126	3.88	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,121	3.14	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,113	2.98	1.11
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	6,084	3.48	1.07
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	6,112	2.00	1.02
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,123	3.99	1.01
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,121	4.03	0.93
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,121	3.95	0.98
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,113	4.01	0.97
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,109	4.19	0.96
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,048	3.89	1.04
II 7 板書のしかたが適切だった	3,546	3.53	1.08
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	5,187	4.22	0.92
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	5,966	4.26	0.85
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,117	3.96	0.96
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,115	3.89	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,114	3.29	1.07
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,103	3.70	1.01
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,115	3.92	1.05
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,115	3.93	0.98
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,114	3.87	1.09
IV 4 この授業を受けて満足した	6,113	3.90	1.06
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	6,058	4.17	0.98
V 2 この授業の受講者数は適切だった	6,054	4.15	0.92
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	6,055	4.21	0.91
V 4 現代心理学部の教育研究設備に満足している	6,040	4.06	0.94

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表 1 3 全学共通カリキュラム

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	11,531	4.59	0.65
I 2 この授業に積極的に参加した	11,525	3.83	0.98
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	11,510	3.03	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	11,496	2.90	1.12
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	11,456	3.49	1.08
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	11,495	1.87	1.01
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	11,526	3.99	1.05
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	11,522	4.03	0.95
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	11,522	3.97	0.98
II 4 各回の授業内容は明確だった	11,505	4.01	0.97
II 5 十分な静粛性が保たれた	11,493	3.85	1.12
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	11,406	3.86	1.04
II 7 板書のしかたが適切だった	6,780	3.44	1.12
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	10,172	4.16	0.97
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	11,276	4.24	0.87
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	11,508	3.87	0.97
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	11,508	3.75	0.96
III 3 自分で調べ、考える姿勢	11,505	3.19	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	11,487	3.65	1.03
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	11,504	3.94	1.05
IV 2 授業全体の目標が明確だった	11,501	3.93	0.99
IV 3 学問的興味をかきたてられた	11,500	3.78	1.07
IV 4 この授業を受けて満足した	11,497	3.85	1.07
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	10,575	4.07	1.07
V 2 この授業の受講者数は適切だった	10,548	4.01	1.02
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	10,539	4.12	0.95

注 1) 回答者数は延べ人数(II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている)

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表 1 4 学校・社会教育講座

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	3,070	4.76	0.51
I 2 この授業に積極的に参加した	3,071	4.11	0.88
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,068	3.37	0.96
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,066	3.19	1.06
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	3,046	3.53	1.02
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	3,067	2.10	1.00
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	3,072	4.25	0.94
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	3,072	4.20	0.88
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	3,067	4.18	0.88
II 4 各回の授業内容は明確だった	3,064	4.23	0.86
II 5 十分な静粛性が保たれた	3,063	4.19	0.97
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,051	4.13	0.90
II 7 板書のしかたが適切だった	2,559	3.72	1.02
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	2,124	4.12	0.98
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,969	4.35	0.81
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	3,071	4.04	0.91
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3,069	3.99	0.85
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3,070	3.51	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3,066	3.86	0.92
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	3,071	4.21	0.93
IV 2 授業全体の目標が明確だった	3,070	4.15	0.90
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3,067	3.87	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	3,067	4.07	0.98

注 1) 回答者数は延べ人数(II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている)

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

6-3 「グループ集計」科目一覧

表 1 5 経済学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	経済学	後期
2	経済学	後期
3	経済学	後期
4	経済学	後期
5	経済学	後期

グループ2

No.	科目名	学期
1	経済数学入門	後期
2	経済数学入門	後期

グループ3

No.	科目名	学期
1	簿記	後期
2	簿記	後期
3	簿記	後期
4	簿記	後期
5	簿記	後期
6	簿記	後期
7	簿記	後期
8	簿記	後期
9	簿記	後期
10	簿記	後期

グループ4

No.	科目名	学期
1	統計学2	後期
2	統計学2	後期

グループ5

No.	科目名	学期
1	情報処理入門2	後期
2	情報処理入門2	後期
3	情報処理入門2	後期
4	情報処理入門2	後期
5	情報処理入門2	後期
6	情報処理入門2	後期
7	情報処理入門2	後期
8	情報処理入門2	後期
9	情報処理入門2	後期
10	情報処理入門2	後期
11	情報処理入門2	後期

グループ6

No.	科目名	学期
1	経済情報処理B	後期
2	経済情報処理B	後期
3	政策情報処理B	後期
4	財務情報処理B	後期

グループ7

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール2	後期
2	基礎ゼミナール2	後期
3	基礎ゼミナール2	後期
4	基礎ゼミナール2	後期
5	基礎ゼミナール2	後期
6	基礎ゼミナール2	後期
7	基礎ゼミナール2	後期
8	基礎ゼミナール2	後期
9	基礎ゼミナール2	後期
10	基礎ゼミナール2	後期
11	基礎ゼミナール2	後期
12	基礎ゼミナール2	後期

グループ8

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール2	後期
2	基礎ゼミナール2	後期
3	基礎ゼミナール2	後期
4	基礎ゼミナール2	後期
5	基礎ゼミナール2	後期
6	基礎ゼミナール2	後期
7	基礎ゼミナール2	後期
8	基礎ゼミナール2	後期
9	基礎ゼミナール2	後期
10	基礎ゼミナール2	後期
11	基礎ゼミナール2	後期
12	基礎ゼミナール2	後期
13	基礎ゼミナール2	後期
14	基礎ゼミナール2	後期
15	基礎ゼミナール2	後期
16	基礎ゼミナール2	後期
17	基礎ゼミナール2	後期
18	基礎ゼミナール2	後期

グループ9

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール2	後期
2	基礎ゼミナール2	後期

表 1 6 経営学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎演習	前期
2	基礎演習	前期
3	基礎演習	前期
4	基礎演習	前期
5	基礎演習	前期
6	基礎演習	前期
7	基礎演習	前期
8	基礎演習	前期
9	基礎演習	前期
10	基礎演習	前期
11	基礎演習	前期
12	基礎演習	前期
13	基礎演習	前期
14	基礎演習	前期
15	基礎演習	前期
16	基礎演習	前期
17	基礎演習	前期
18	基礎演習	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	BL1	後期
2	BL1	後期
3	BL1	後期
4	BL1	後期
5	BL1	後期
6	BL1	後期
7	BL1	後期
8	BL1	後期
9	BL1	後期
10	BL1	後期

グループ2

No.	科目名	学期
1	BL2	前期
2	BL2	前期
3	BL2	前期
4	BL2	前期
5	BL2	前期
6	BL2	前期
7	BL2	前期
8	BL2	前期
9	BL2	前期
10	BL2	前期

表 17 異文化コミュニケーション学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎演習1	前期
2	基礎演習1	前期
3	基礎演習1	前期
4	基礎演習1	前期
5	基礎演習1	前期
6	基礎演習1	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	Cultural Exchange	前期
2	Cultural Exchange	前期
3	Cultural Exchange	前期
4	Cultural Exchange	前期
5	Cultural Exchange	前期
6	Cultural Exchange	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	基礎演習2	後期
2	基礎演習2	後期
3	基礎演習2	後期
4	基礎演習2	後期
5	基礎演習2	後期
6	基礎演習2	後期

表 18 コミュニティ福祉学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	法学2	後期
2	心理学2	後期
3	生涯学習概論2	後期
4	社会教育計画2	後期

グループ2

No.	科目名	学期
1	情報処理2	後期
2	宗教人間学	後期
3	哲学的人間学	後期
4	社会福祉と法	後期
5	社会調査法	後期
6	生涯スポーツ論	後期
7	高齢者福祉実践論	後期
8	キリスト教社会福祉	後期
9	臨床社会学	後期

グループ3

No.	科目名	学期
1	グループワーク	後期
2	公的扶助論	後期
3	宗教心理学2	後期
4	福祉人間学	後期
5	社会福祉施設経営論	後期
6	福祉マネジメント特論3	後期
7	リハビリテーション心理学	後期
8	リハビリテーション論	後期
9	グループダイナミクス	後期
10	精神保健学2	後期

グループ4

No.	科目名	学期
1	発達障害論	後期
2	障害者福祉論	後期
3	障害幼児ソーシャルワーク論	後期

グループ5

No.	科目名	学期
1	統計学入門	後期
2	少子高齢社会論	後期
3	政策科学	後期
4	平和学	後期
5	余暇生活論	後期
6	環境政策	後期
7	比較文化心理学	後期
8	障害者スポーツ実践論	後期
9	データ分析法	後期
10	コミュニティ政策特論	後期

グループ6

No.	科目名	学期
1	運動処方論	後期
2	スポーツ科学総論	後期
3	体カトレーニング論	後期
4	アダプテッドスポーツ論	後期
5	ウェルネス文化特論	後期
6	スポーツマネジメント論	後期

表 1 9 現代心理学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	統計法1	前期
2	統計法1	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	統計法2	後期
2	統計法2	後期

グループ3

No.	科目名	学期
1	心理学文献講読2	後期
2	心理学文献講読2	後期
3	心理学文献講読2	後期
4	心理学文献講読2	後期
5	心理学文献講読2	後期
6	心理学文献講読2	後期

グループ4

No.	科目名	学期
1	統計法1	前期
2	統計法1	前期
3	統計法2	後期
4	統計法2	後期

教育調査の検討グループ（2012年9月現在）

座長	西原 廉太	(副総長、文学部)
	間々田 孝夫	(社会学部長)
	東條 吉純	(教務部副部長、法学部)
	原田 久	(法学部、副総長)
	山口 和範	(経営学部)
事務局	石田 和彦	(企画部企画課)
	今田 晶子	(大学教育開発・支援センター)
	佐藤 百恵	(大学教育開発・支援センター)
	上原 裕輔	(大学教育開発・支援センター)

2011年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長	東條 吉純	(教務部副部長、法学部)
事務局	今田 晶子	(大学教育開発・支援センター)
	伊藤 直子	(大学教育開発・支援センター)
	上原 裕輔	(大学教育開発・支援センター)
	間中 賢治	(教務事務センター)
	増田 絵里子	(新座キャンパス事務部教務課)

2011年度「学生による授業評価アンケート」報告書

2012年9月発行

編集 立教大学 2011年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>

e-mail cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

